秋月型駆逐艦

対空戦に威力を発揮した空母直衛艦の勇姿

カラー特集●1/100スーパースケール「秋月」新造時
PHOTO DOCUMENT●実写に見る秋月型のディテール
ワイド折込み●精密イラスト「涼月」
1/100「秋月」上部平面・右舷側面
1/100「AKIZUKI」WIDE PHOTO
特別綴込付録●「秋月・初月・冬月・春月」公式図面
2Cメカニックス●「65口径10センチ高角砲」
「図解・25ミリ連装機銃」

［歴史群像］
太平洋戦史シリーズ
Vol.23

徹底調査●駆逐艦「秋月」の実像
考証図説●秋月型の基礎知識
特別企画●日本駆逐艦の戦闘被害調査

ANTI-AIRCRAFT DESTROYER “AKIZUKI”

1/100 SUPER SCALE MODEL

駆逐艦「秋月」

1/100精密模型が再現する新造時の全容

模型製作＝矢座伸行

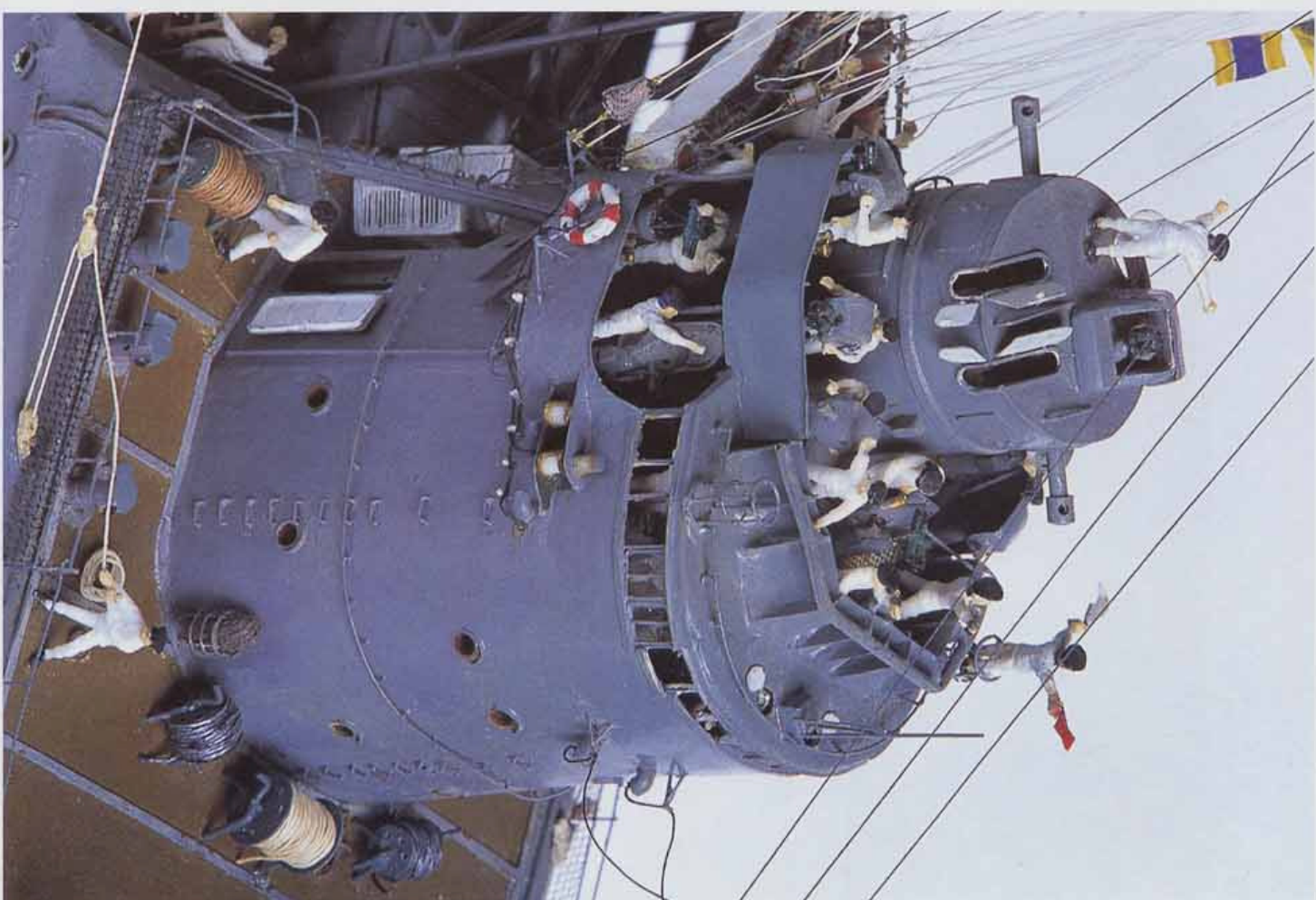
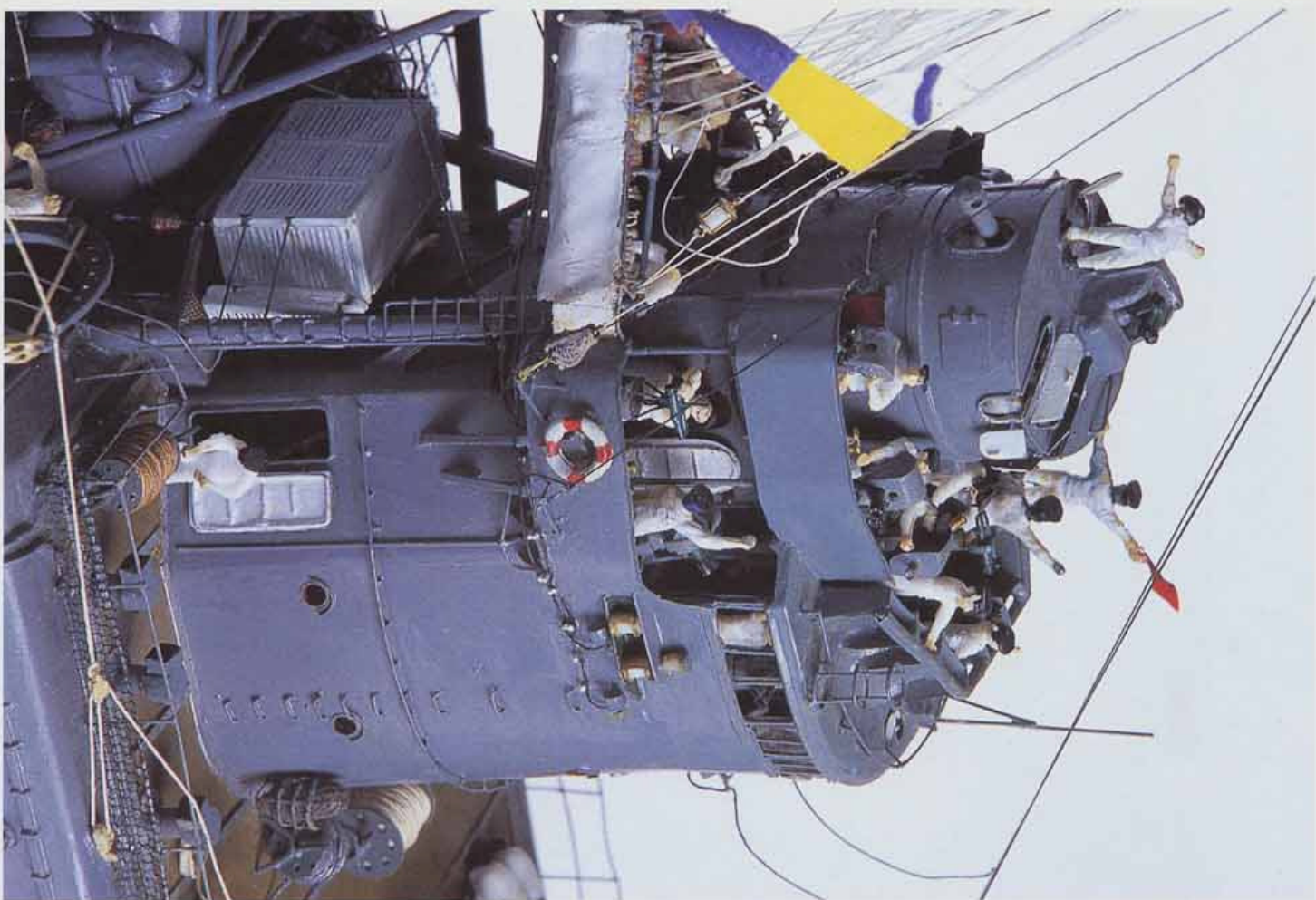
撮影＝黒柳了一・森岡　篤

1/100 SUPER SCALE MODEL/AKIZUKI
キヅキア

1/100 SUPER SCALE MODEL/AKIZUKI

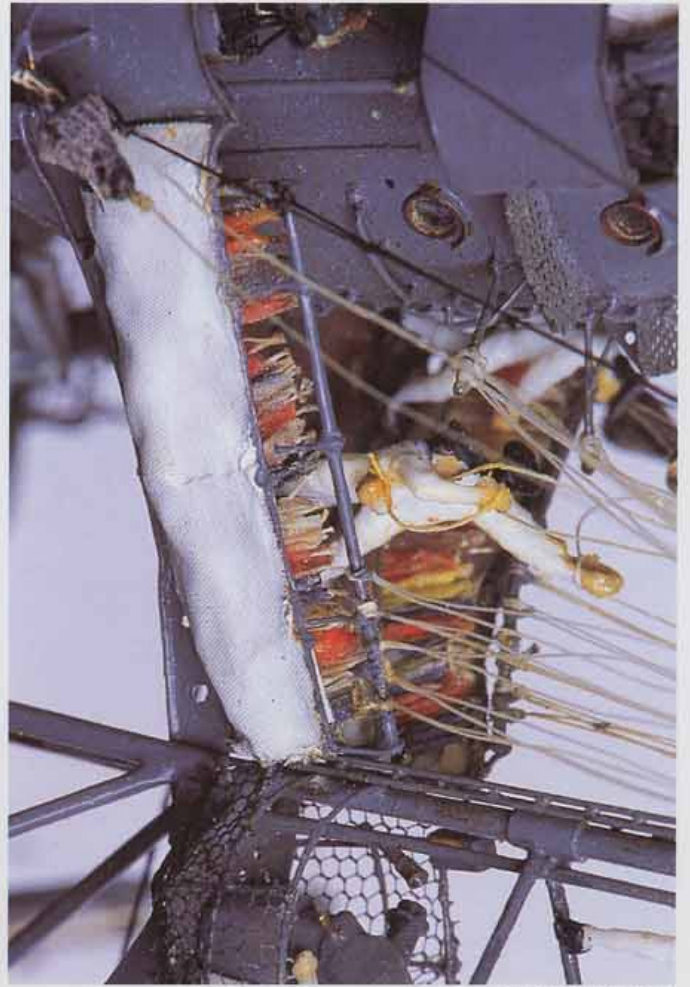
1/100 SUPER SCALE MODEL/AKIZUKI
アキヅキ
アキヅキ
あきづき

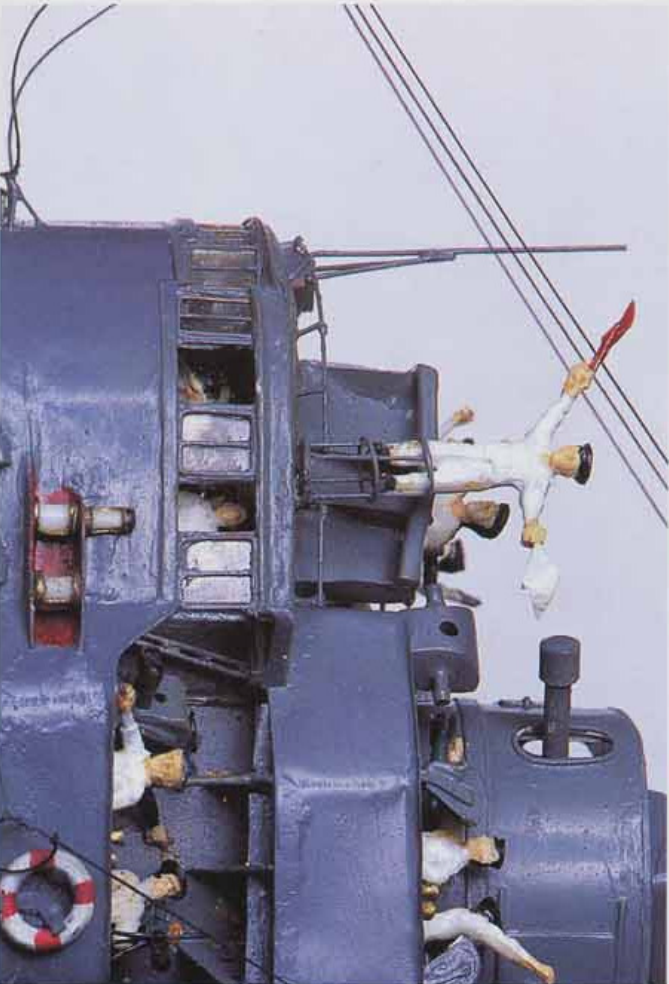
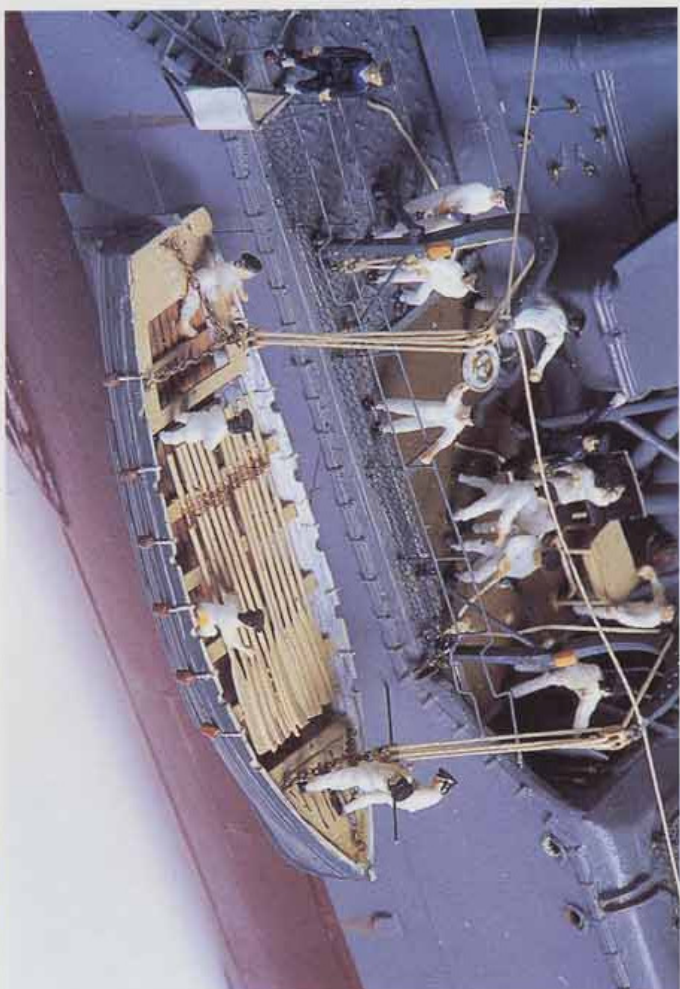
旧日本海軍艦艇中、大和型戦艦は別格として、秋月型は軍艦ファンに人気が高い船といわれる。今回は、そのネームシップ「秋月」の完成時の超精密模型である。一見して判るように、この作品がユニークなのは各科の乗組員の作業・訓練の様子まで表現していることで、中には罰直の腕立て伏せをさせられているシーンもある。さらに、前部マストの「秋月」艦名符字「JJZD」の国際信号旗や艦尾の軍艦旗のたなびきを見ると、風向きの設定までしてある凝った作品となっている。

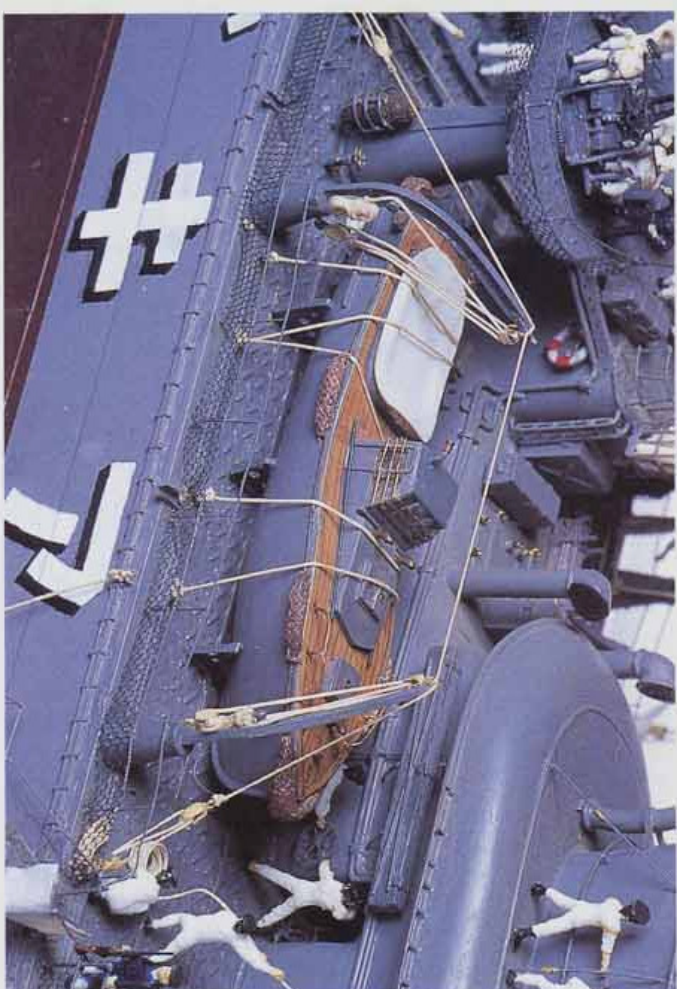
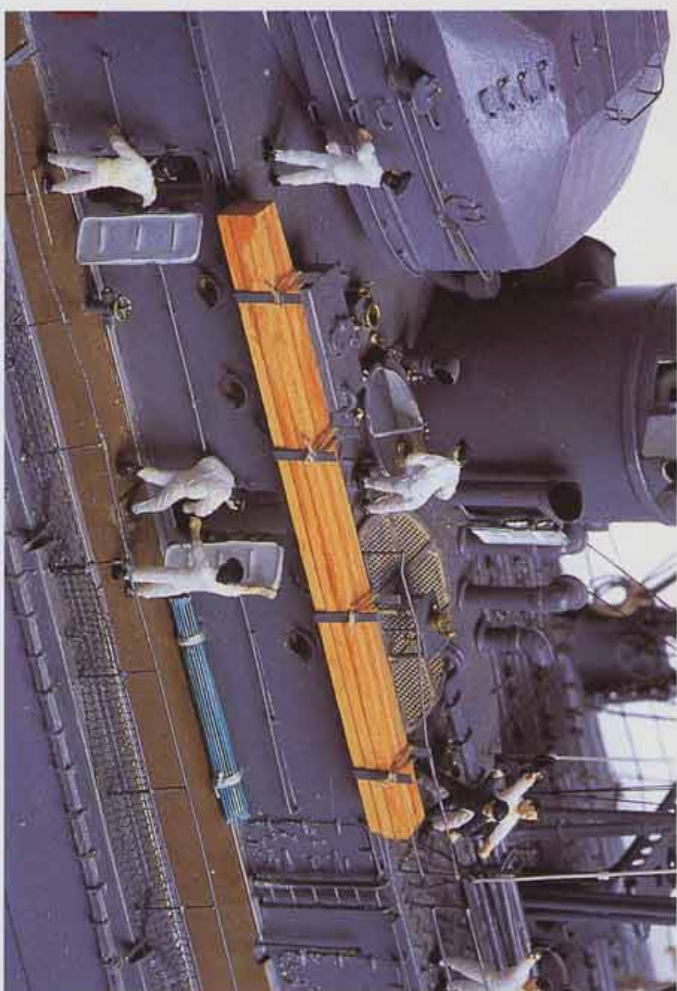
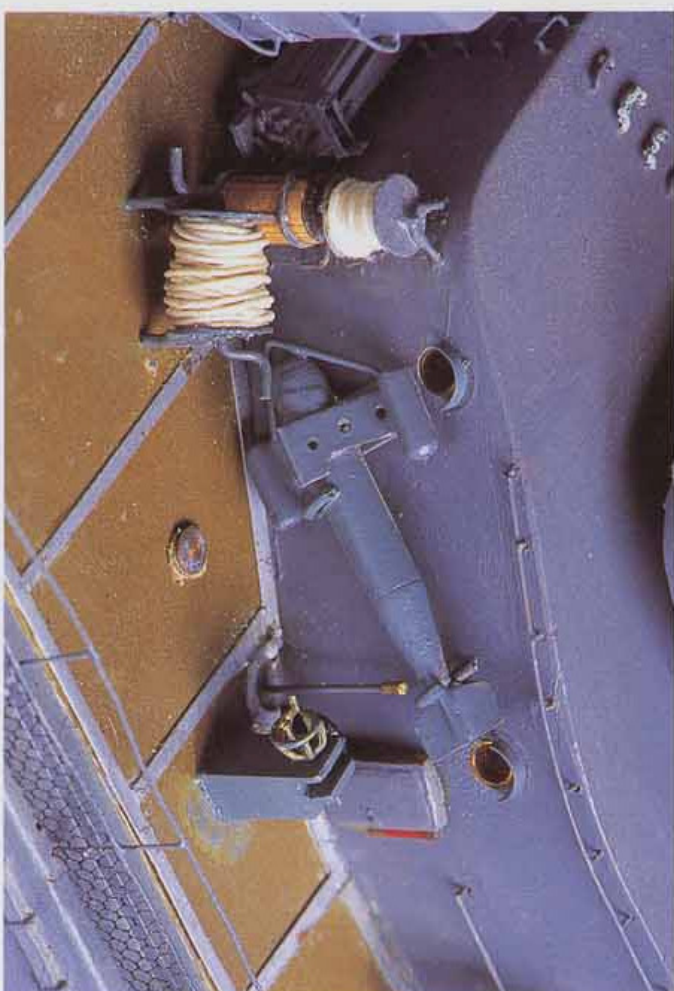
羅針艦橋の天蓋上の防空指揮所。ブルワーク前面には風や波しぶきが巻き込むのを防ぐ遮風装置が施されている。

乗組員のフィギュアと比較すると艦橋は狭く、必要最小限の大きさであることが判る。キャンバスで囲った所は「旗甲板」と通称する信号所。

艦橋は羅針艦橋甲板から下方が末広がりの形状になっている。高射機は頑丈な三脚支柱に支えられていて、艦橋後方下部にその支柱が見える。

電探アンテナ装備以前の前部マスト（前檣）は吹雪型以降の三脚檣と大きな相違はない。見張所下のバーが信号桁でJJZDの旗が掲揚されている。

艦橋上の信号旗台では信号員が手旗信号を送っている。

羅針艦橋天蓋上のマストは艦隊内連絡用の九〇式無線電話機のアンテナ。

信号所（旗甲板）のアップ。色とりどりの信号旗が納められている。

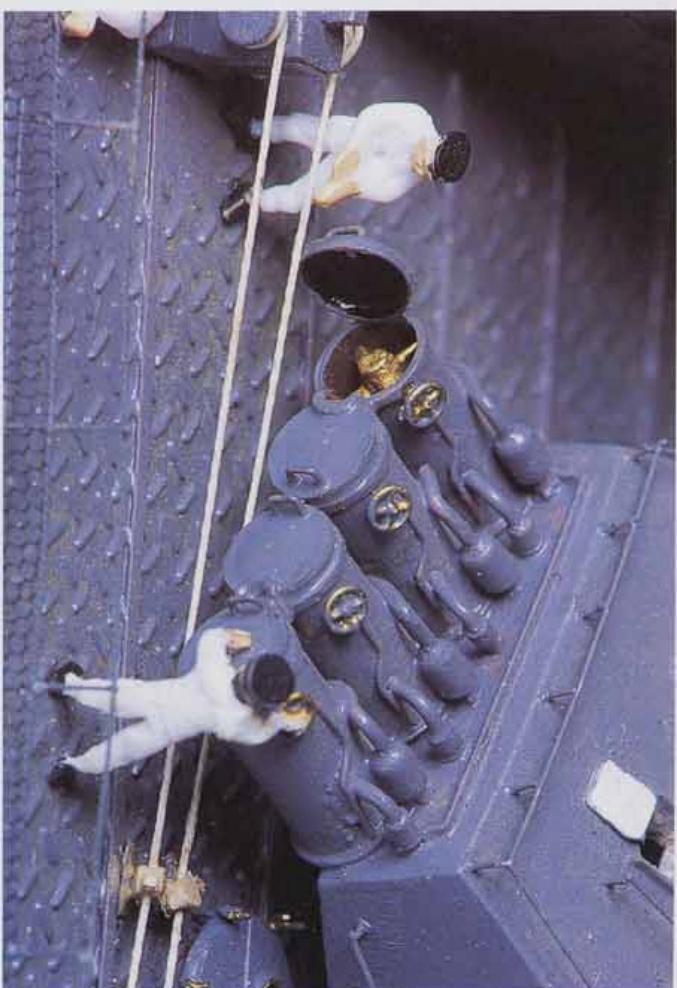
艦橋後ろ側に設置された野菜箱。ここは後に電探室にあてられる。

右舷の九メートル「カッター」の揚げ降ろし訓練風景。

格納状態の右舷の九メートル「内火艇（うちびてい）」。

煙突上部のH型煙突は烹炊室用。煙突前面の二本と後部のパイプはボイラー蒸気捨管。煙突前方の二本の索は汽笛の引索だが、この表現は珍しい。

四連装発射管後部。左側の発射管に二重反転プロペラが見えている。

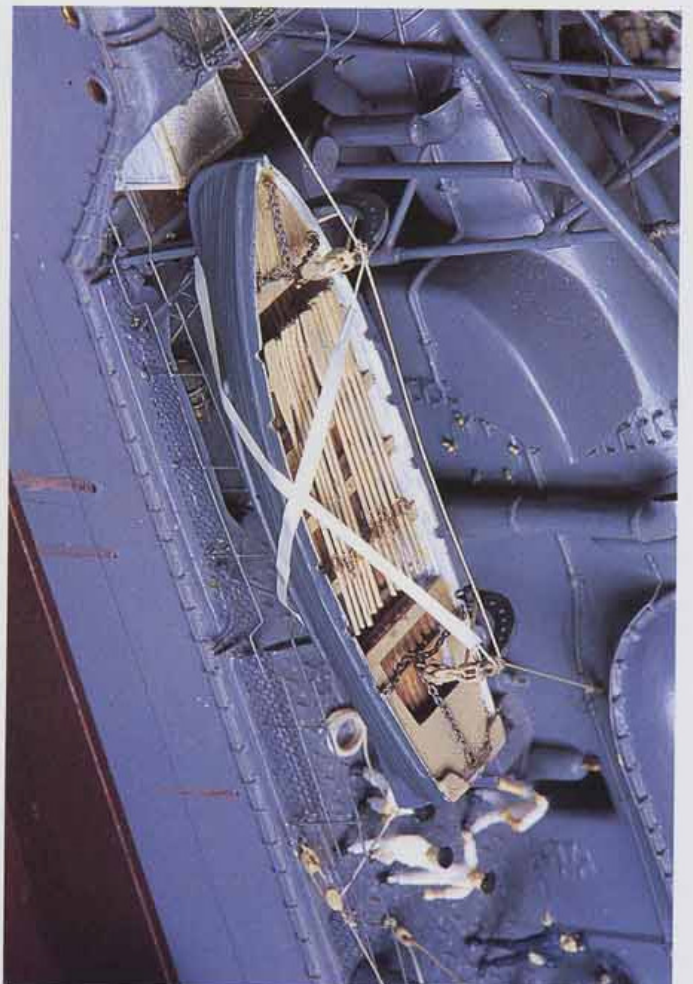
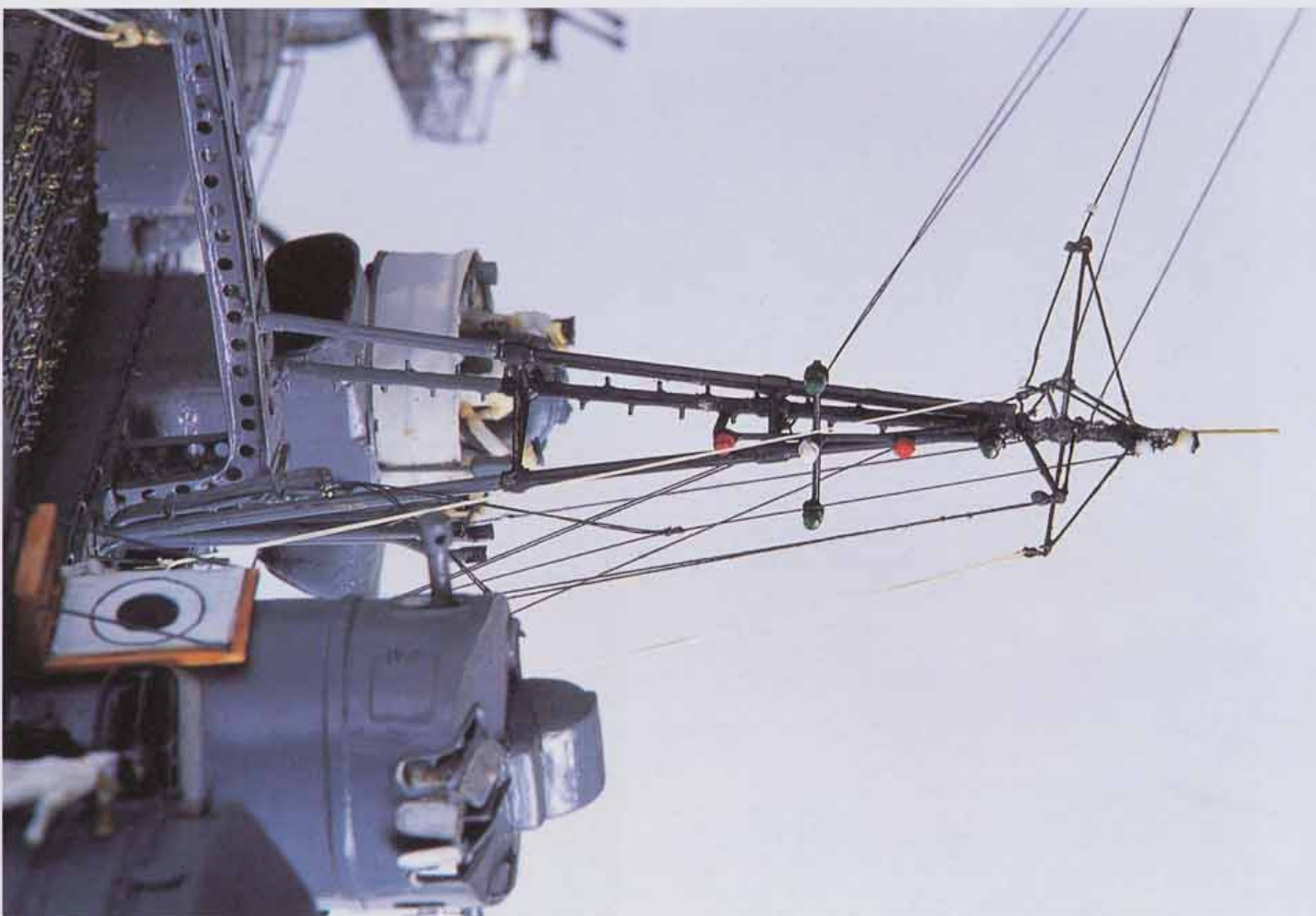
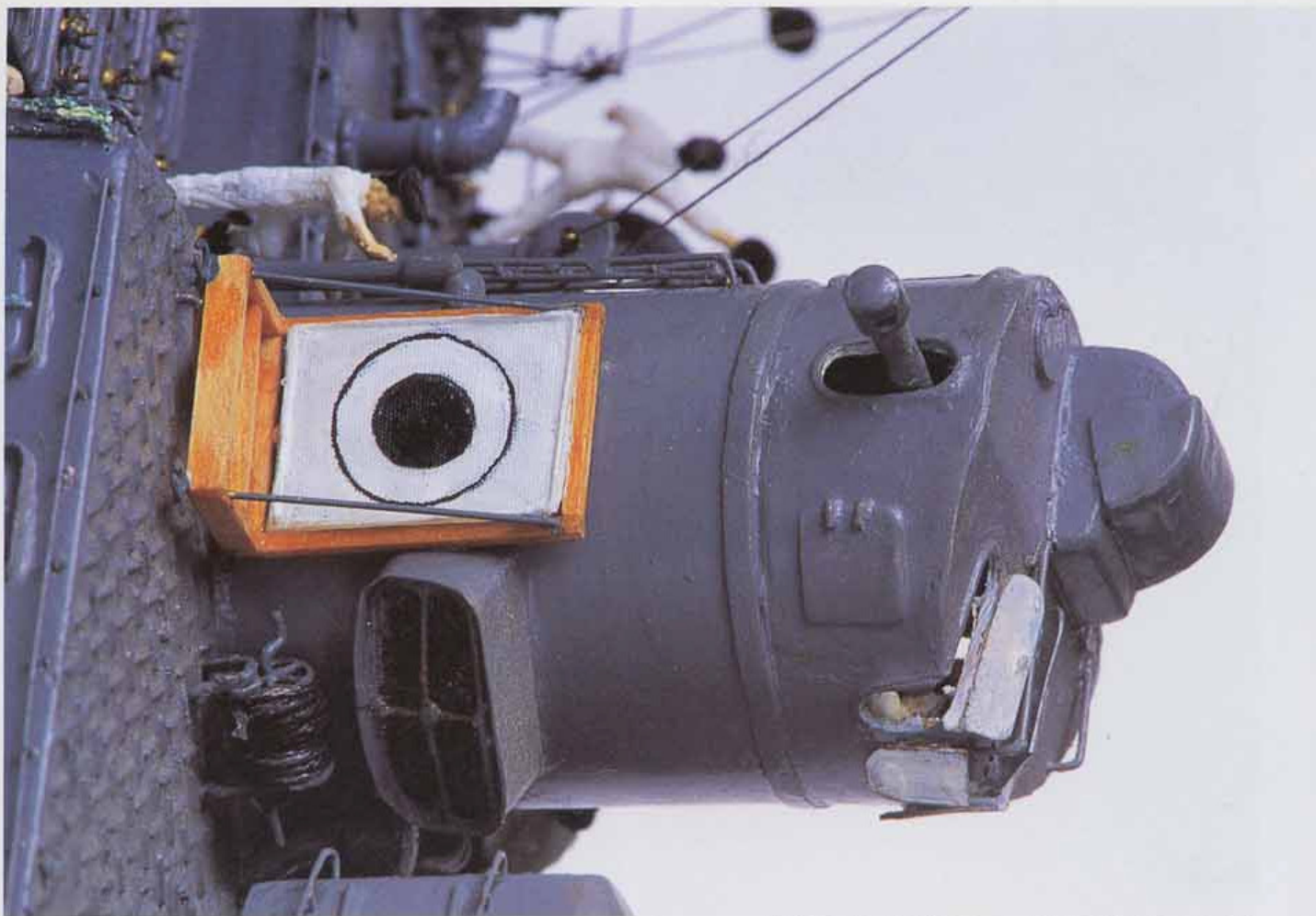
三番砲塔、高射機覆塔などが設置されている後部シェルター甲板。

予備魚雷格納所の横で罰直の腕立て伏せをさせられているシーン。

シェルター甲板後部。防雷具に見えるが公式図では「霧中標的」とある。

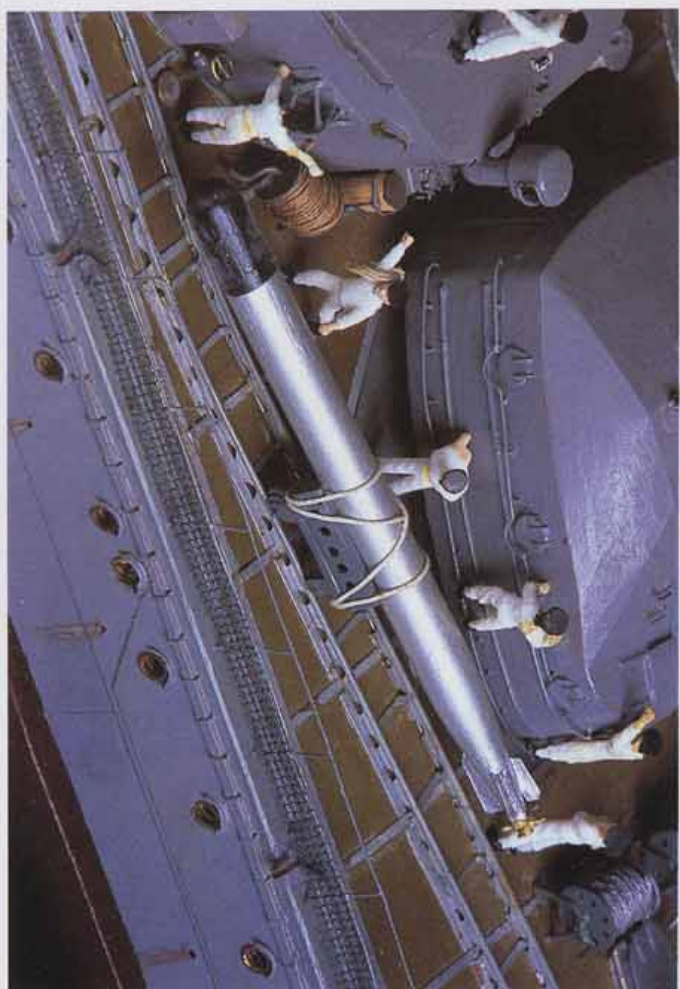
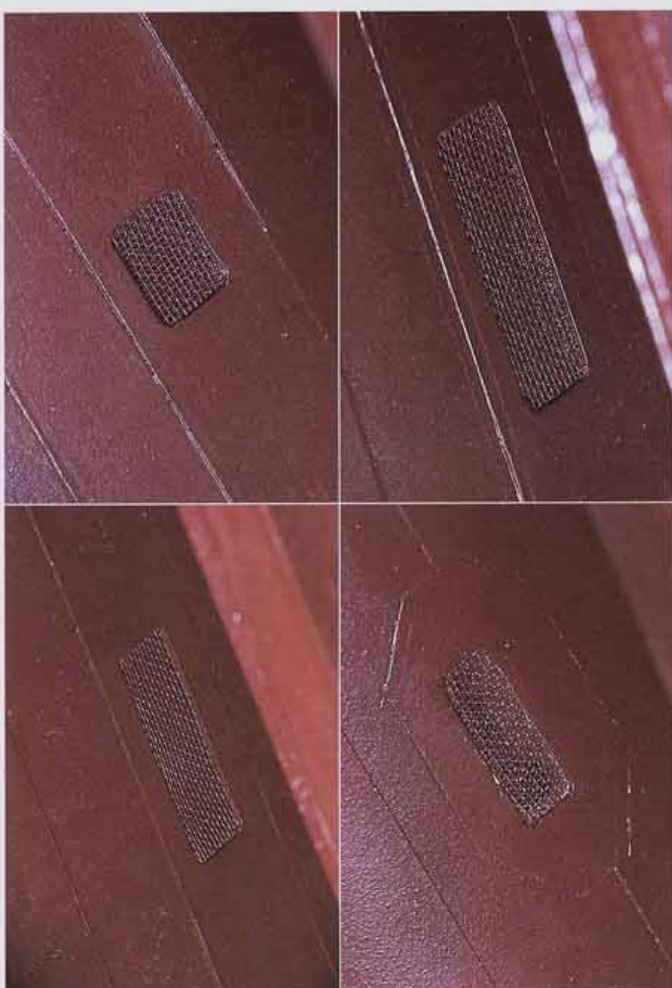
格納状態の左舷の九メートル「カッター」。

左舷の九メートル内火艇の揚げ降ろし訓練。

煙突と魚雷発射管の中間にある二五ミリ連装機銃二基の機銃台。

九二式四連装発射管四型。装填されているのは赤色頭部の訓練用魚雷。

後部マスト周辺。九〇センチ探照灯台、九四式高射装置の高射機（四・五メートル高角測距儀）覆塔、魚雷移送用スキッドビームなどが見える。

後部三・四番砲射撃指揮用の九四式高射装置の高射機覆塔。ただし、実際には中身は装備されなかったという。的状のものは照準演習機用標的。

艦尾甲板の爆雷装填台と両舷同時発射のY型の九四式爆雷投射機。

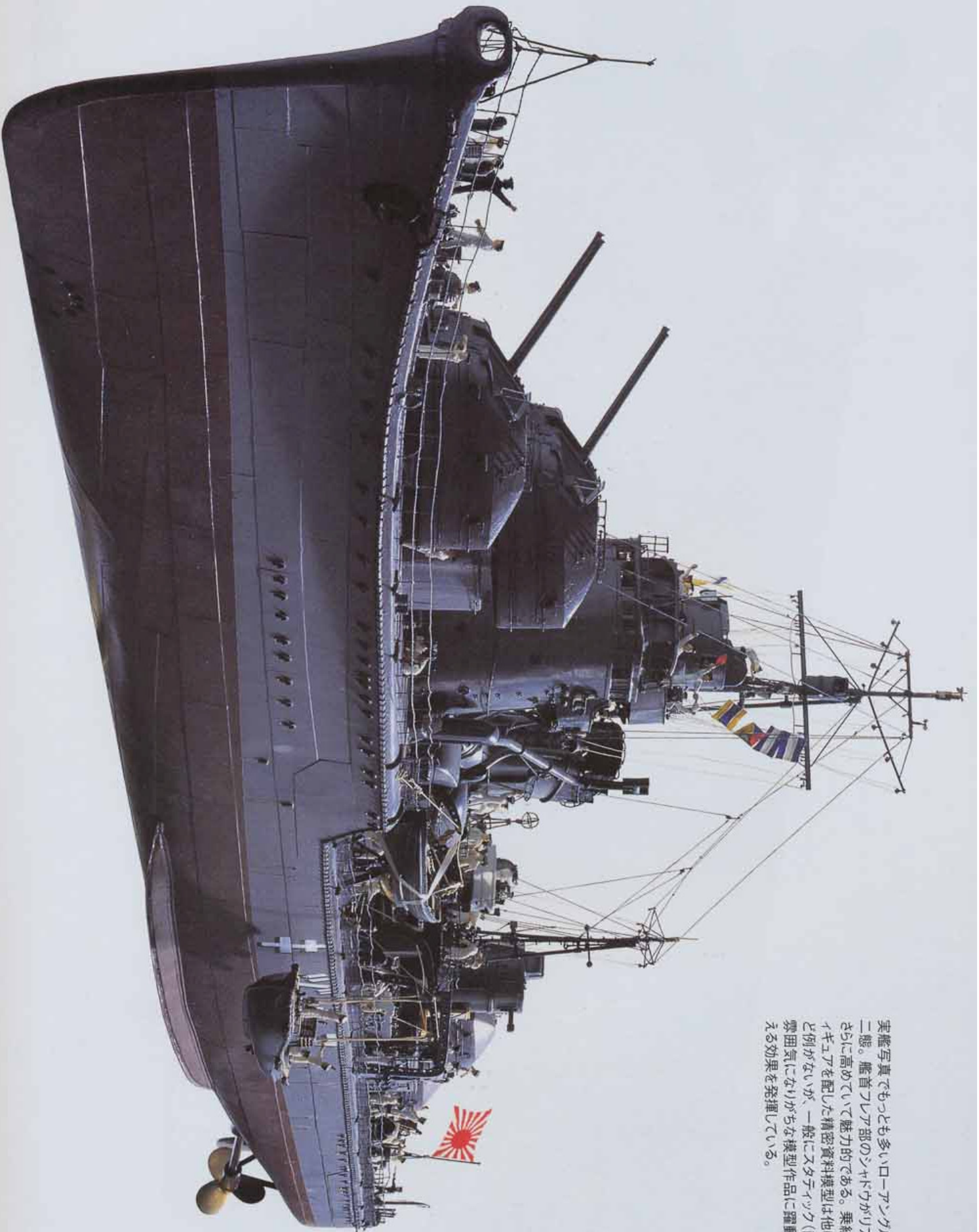
船底にある機関冷却用の海水注水孔（右上）。他の三箇所は排水孔。

運搬用レール上の黒色実用頭部装着の九三式六一センチ酸素魚雷。

四番砲塔のアップ。左に見えるのが九三式六一センチ酸素魚雷の尾部。

1/100 SUPER SCALE MODEL/AKIZUKI

吹雪型以来、日本駆逐艦の定番となった長めの船首楼船型は、前部砲塔2基配置の秋月型ではさらに延長されている。低い位置から撮影した後方からの眺めは、本艦型の特徴をよくとらえ、同時にリアル感も出ている。ちなみに、「秋月」は希有なことに実艦の船体外鈑展開図が残存し、この模型はそれに基づいて外鈑が表現されている。

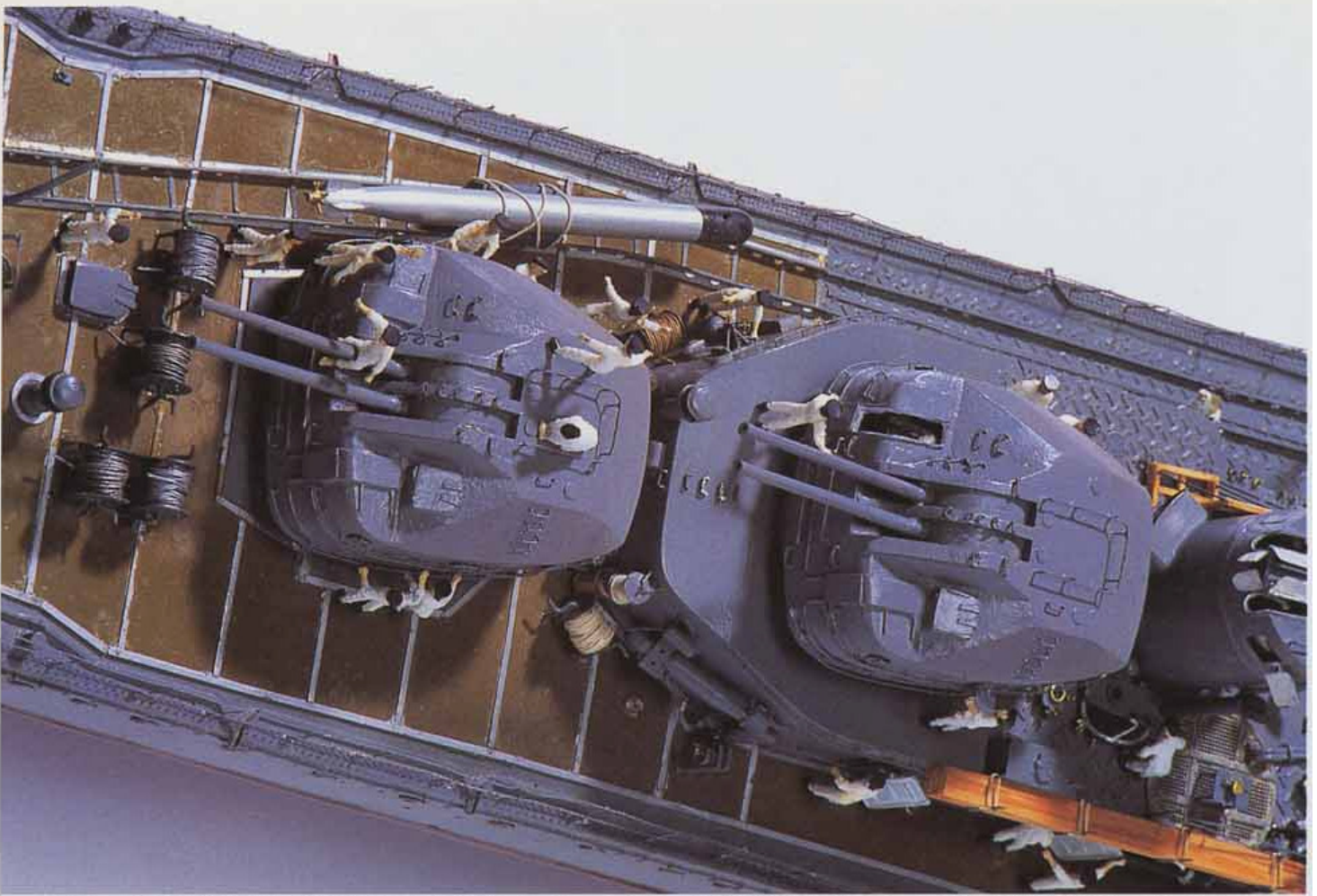
1/100 SUPER SCALE MODEL/AKIZUKI
あきづき
アキヅキ

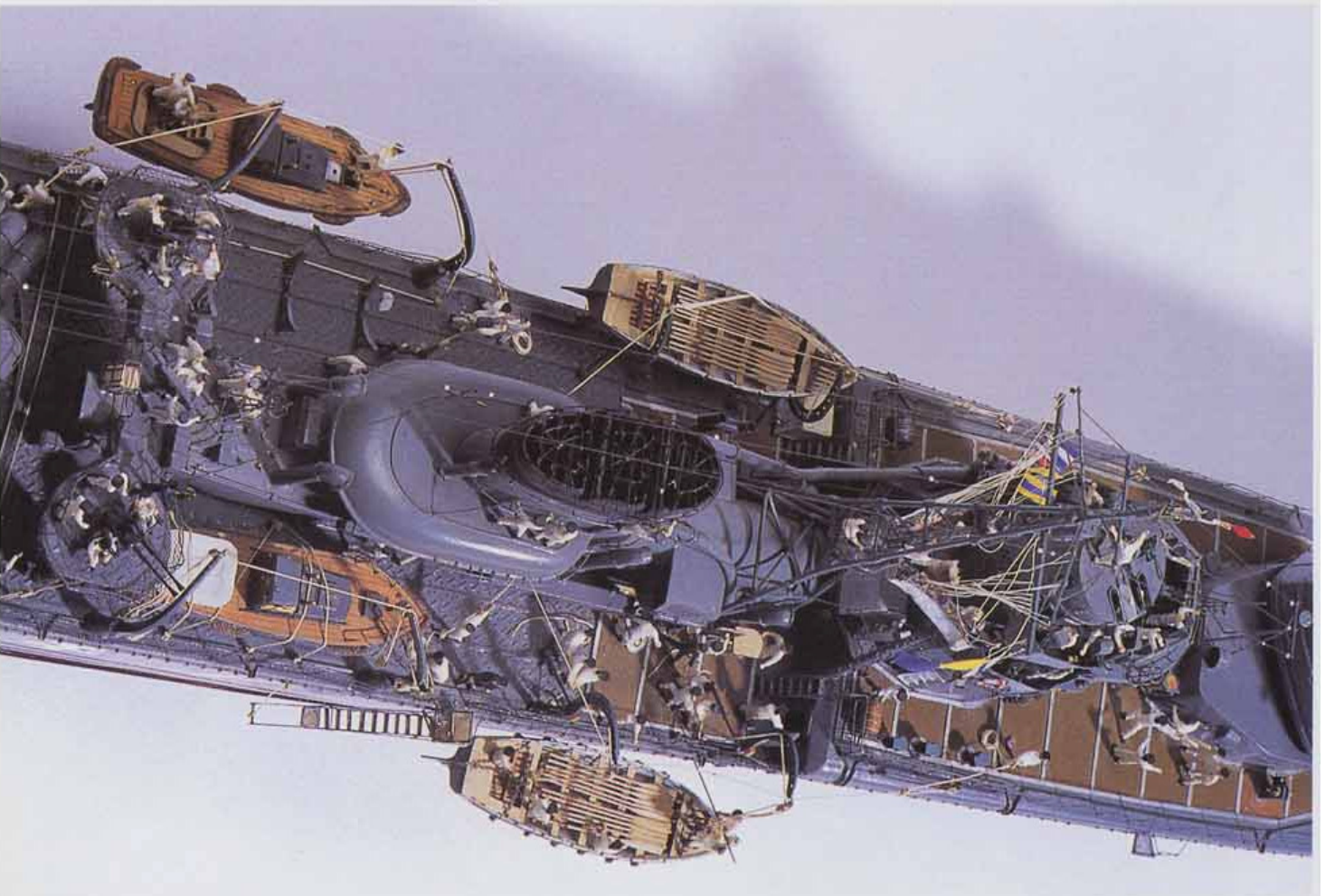
実艦写真でもっとも多いローアングルによる二態。艦首フレア部のシャドウがリアル感をさらに高めていて魅力的である。乗組員のフィギュアを配した精密資料模型は他にほとんど例がないが、一般にスタティック（静的）な雰囲気になりがちな模型作品に躍動感を与える効果を発揮している。

船も飛行機も斜め後方からの眺めがもっとも魅力的といえるだろう。4×5判カメラのアオリを効かせた深い被写界深度での鮮明な画像は、「秋月」の重厚感を余すところなく表現している。

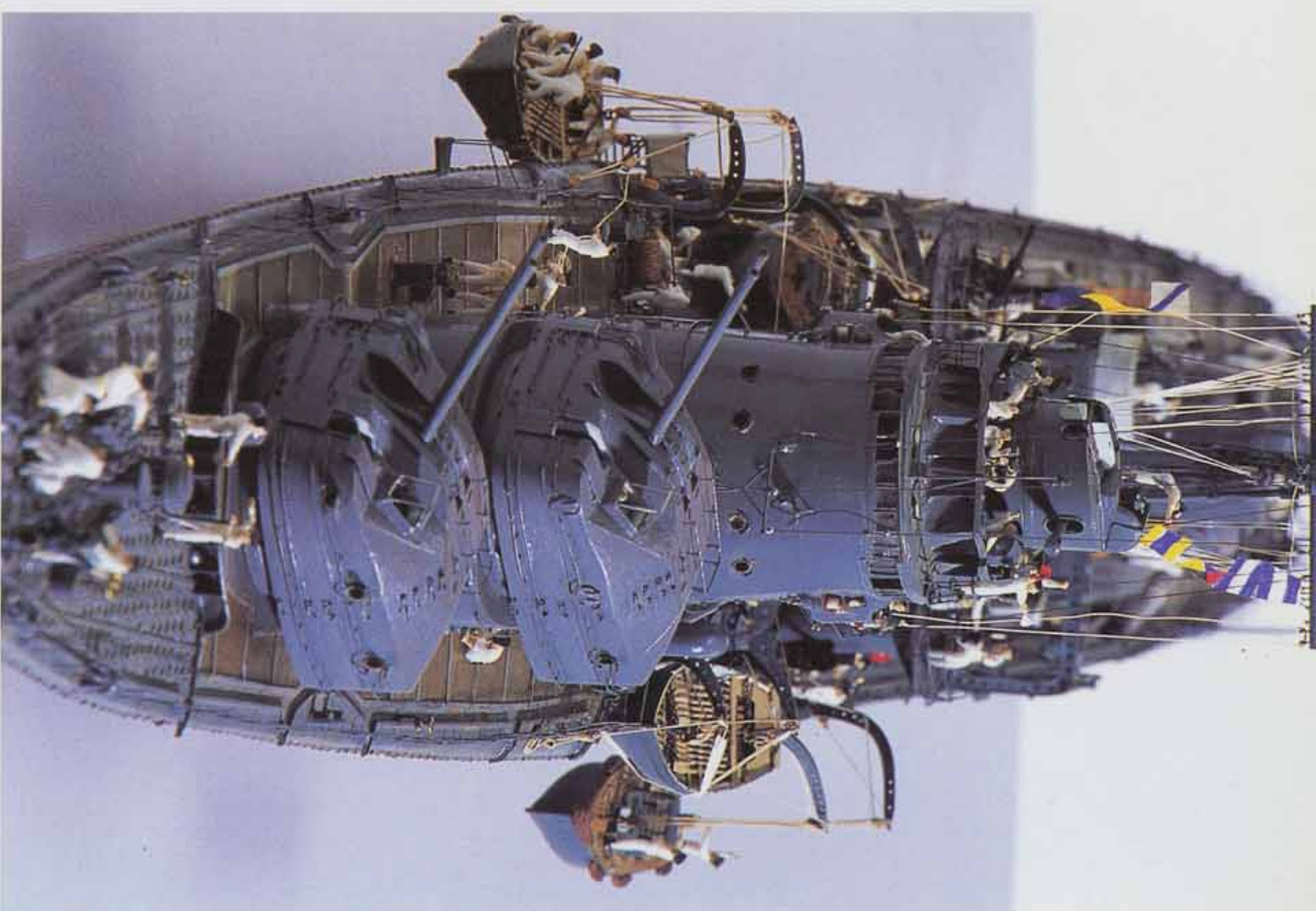
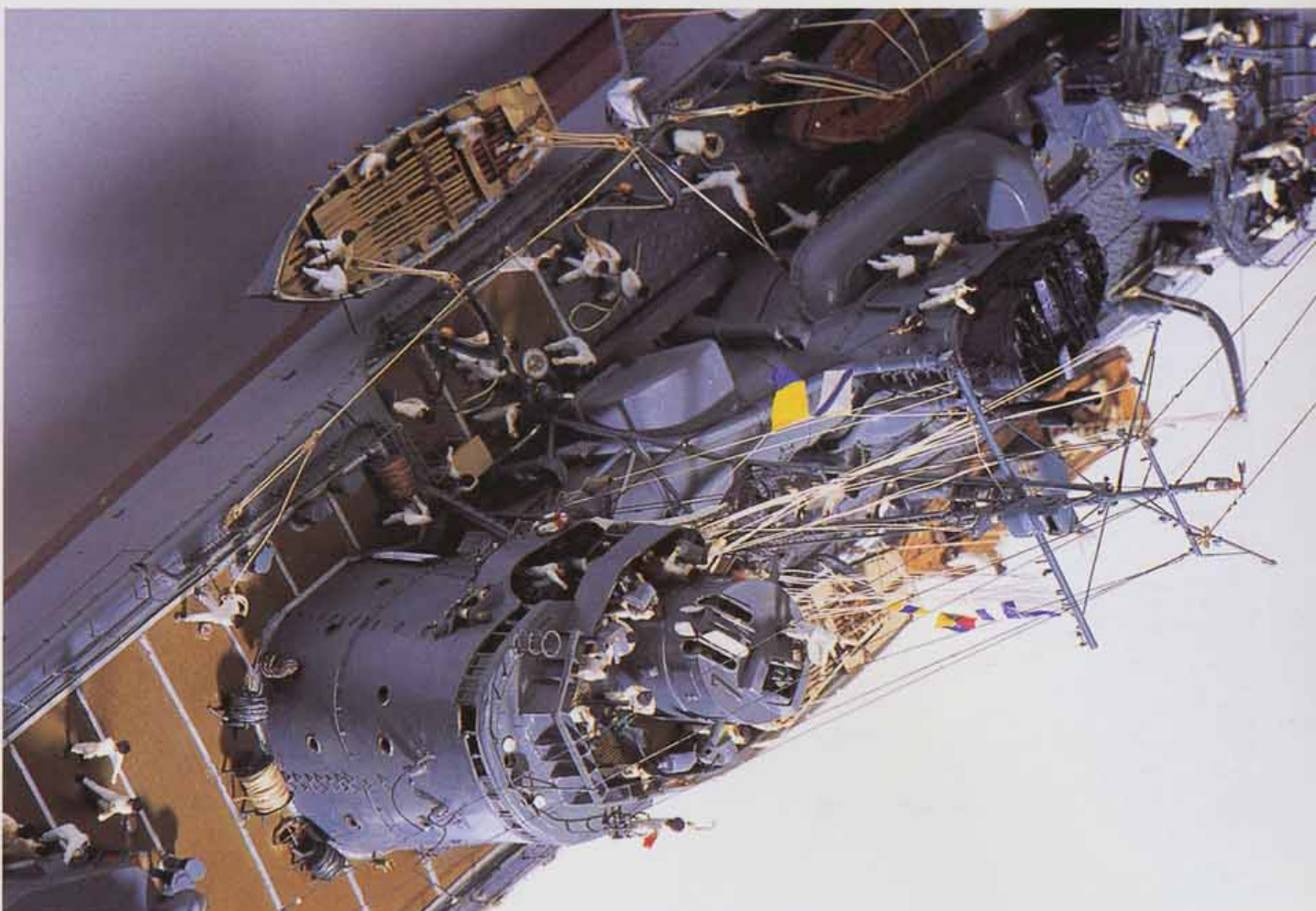
1/100 SUPER SCALE MODEL/AKIZUKI

ハイアングルからの半逆光ショット。明部と暗部のコントラストが立体感をさらに強調している。秋月型駆逐艦の人気は高いが，模型作品は「秋月」に集中している。資料の関係もあるが，将来は「涼月・冬月・春月」など他艦の模型（できれば1/100で）の登場を望みたいものである。

背負式配置の一・二番九八式六五口径一〇センチ連装高角砲。

砲室内にも照準手などの砲員のフィギュアが配されている。

艦首錨甲板。スチール甲板の滑り止め表現が丹念になされている。

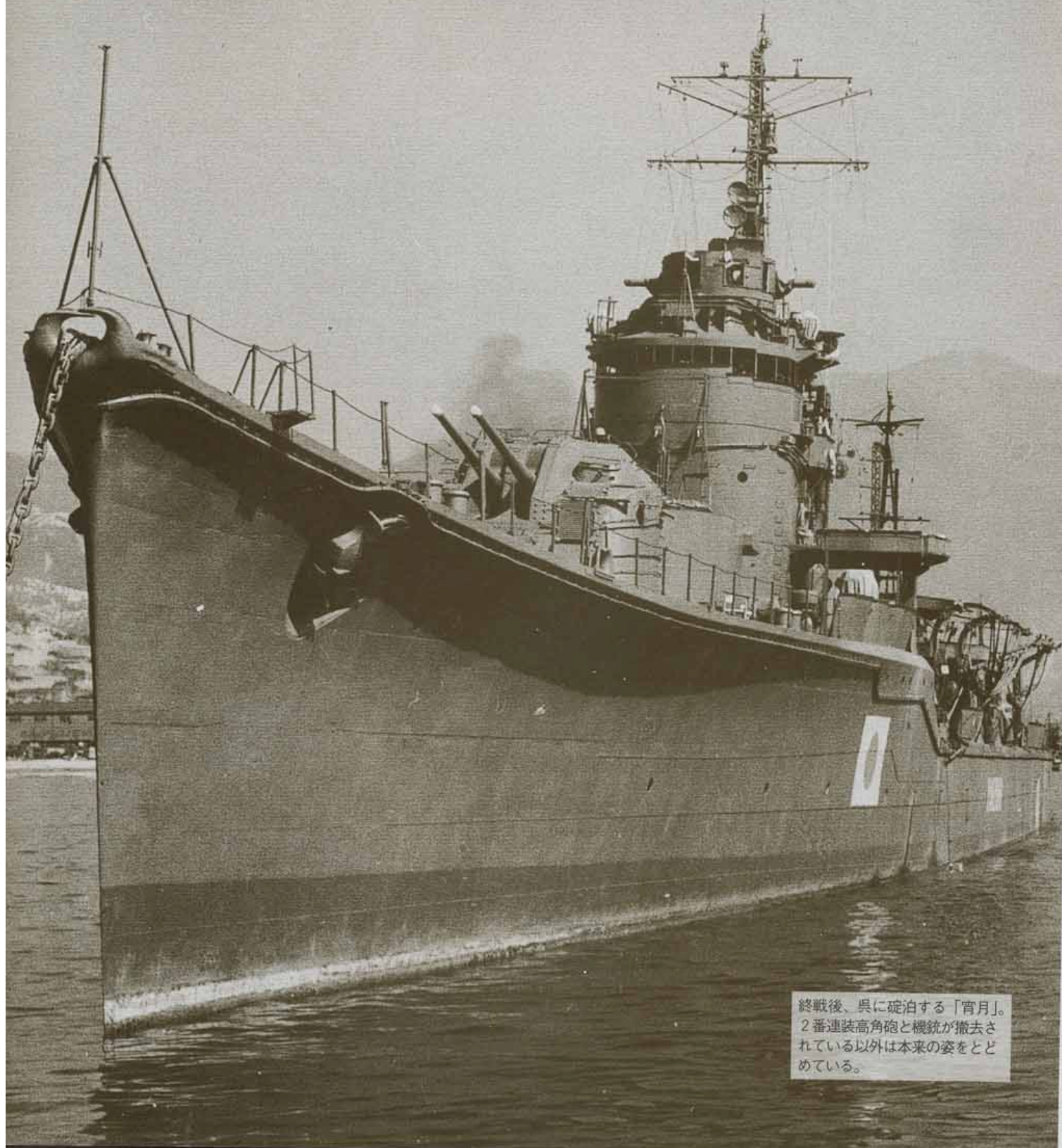
同じく錨甲板。錨鎖、キャプスタンなどの係船装置がリアルである。

艦中央部の俯瞰。煙突下の船体内には三つのボイラー室が納まる。煙突後方の機銃台上の連装機銃は後に三連装に強化された。

後部の三番・四番連装高角砲。砲室シールドは秋月型独特の形状であるが、ジャッキステーや補強材などの付着物が各艦で微妙に異なるといわれる。

右舷上空に指向された主砲の一番・二番連装高角砲。口径一〇センチ、砲身長はその六五倍（尾栓頭までの長さ）という細長い砲身が印象的。

防空直衛艦として駆逐艦型では初めて艦橋天蓋上に防空指揮所が設置された。艦橋トップの九四式高射装置も一・二番砲と同様の方向を指向している。

見開き4点は、構図と光線条件をそれぞれ変えて撮影したもので、模型としての「秋月」の精密な重厚感を味わえるとともに、残存する実艦写真にはまったくない角度から、その艦容をつぶさに観察できるものである。

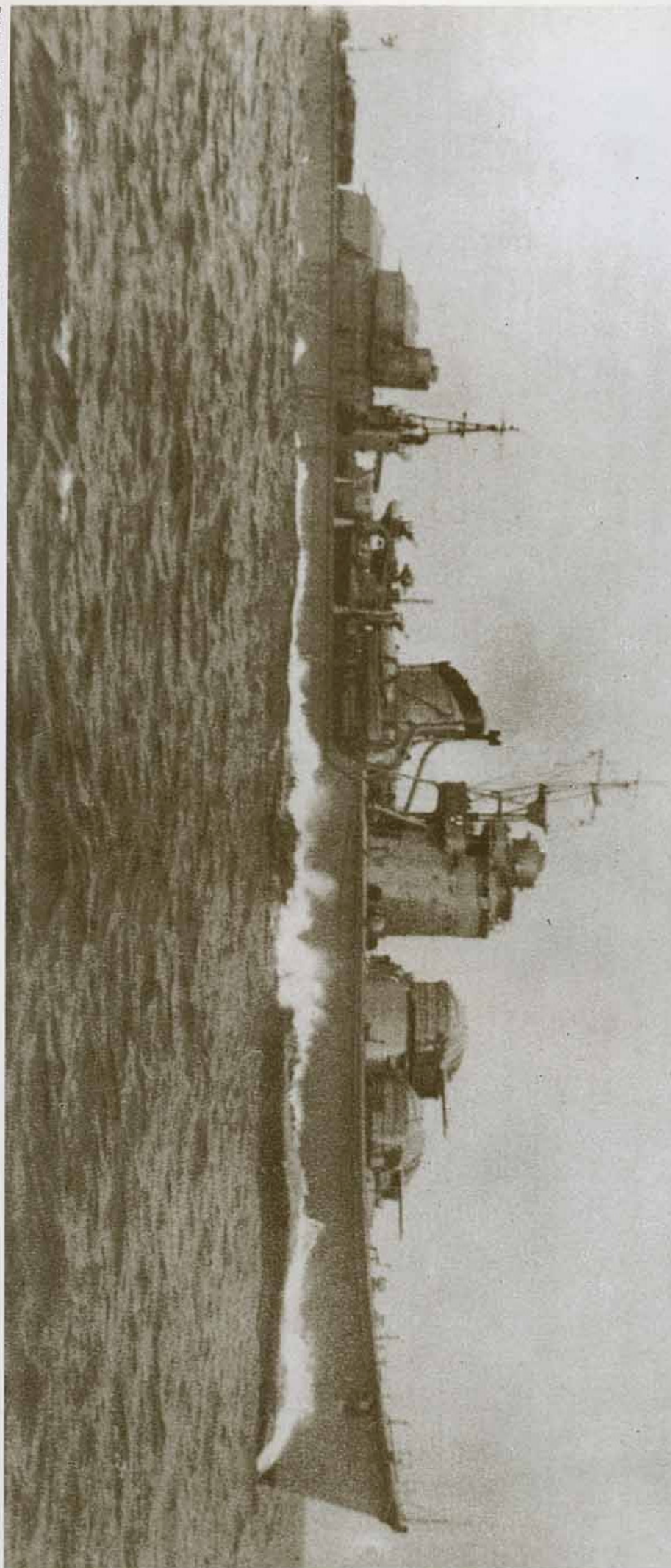
PHOTO DOCUMENT

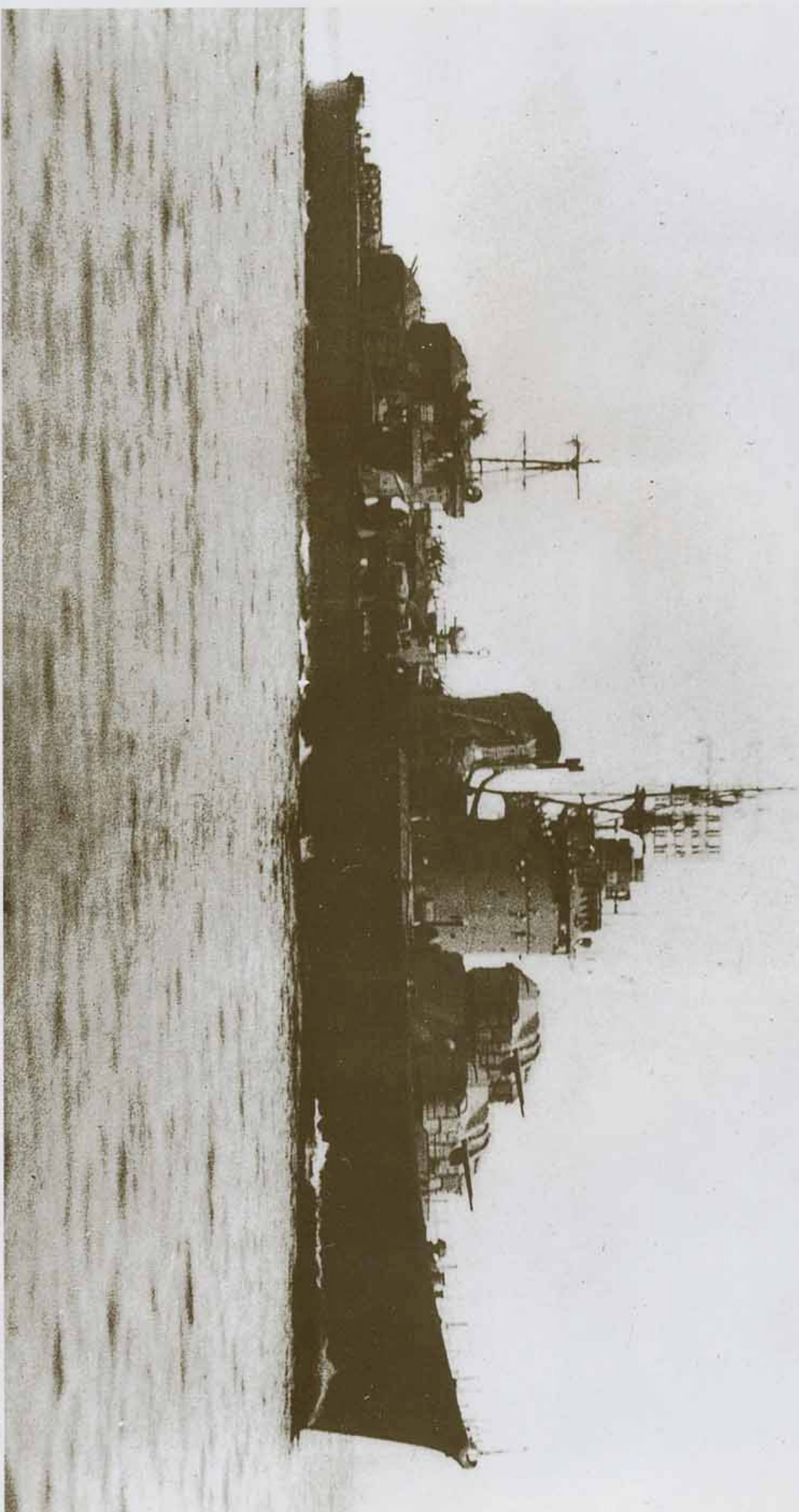
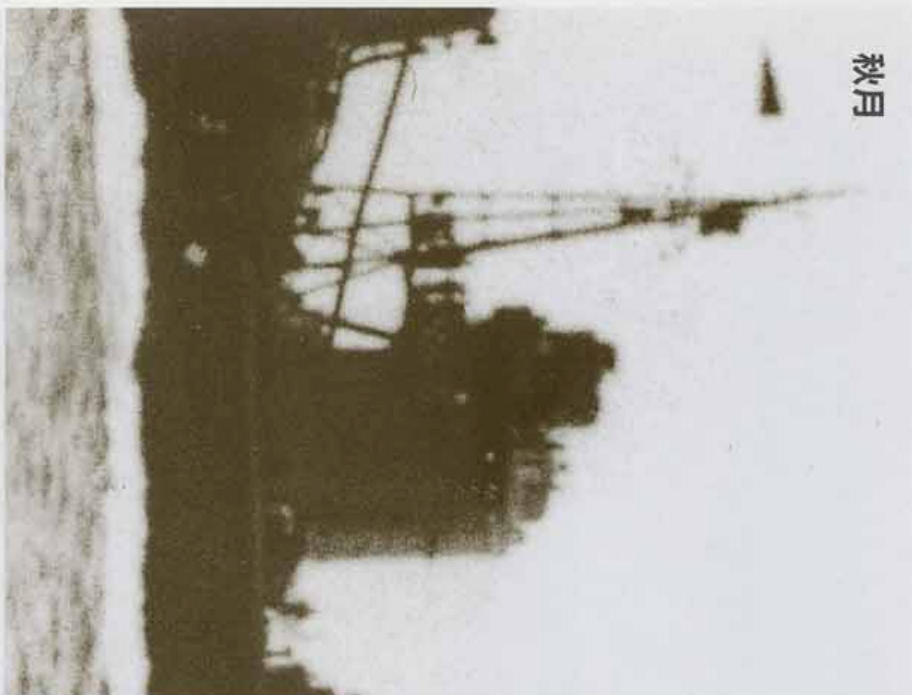
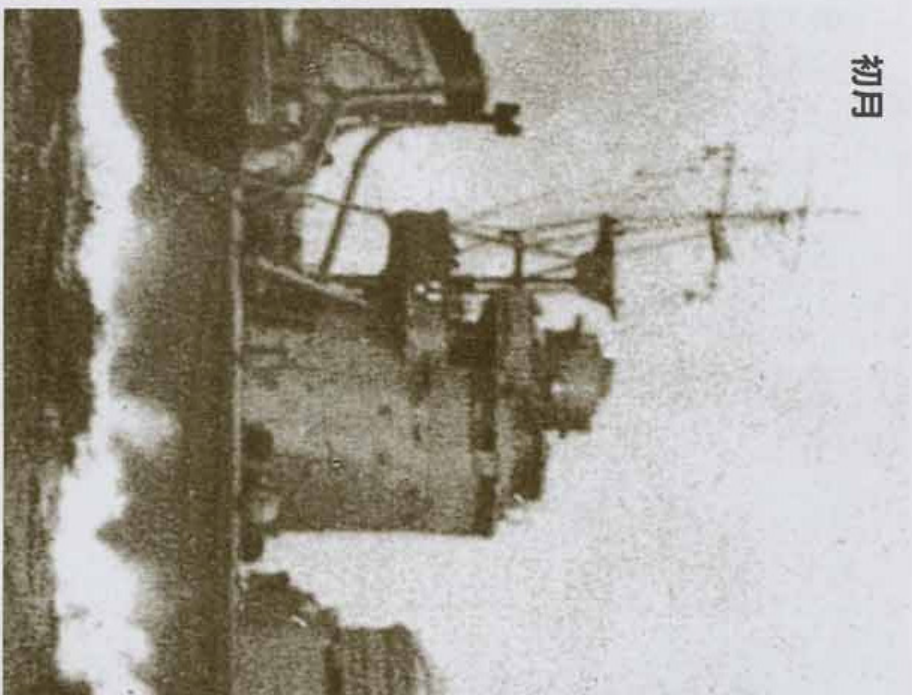
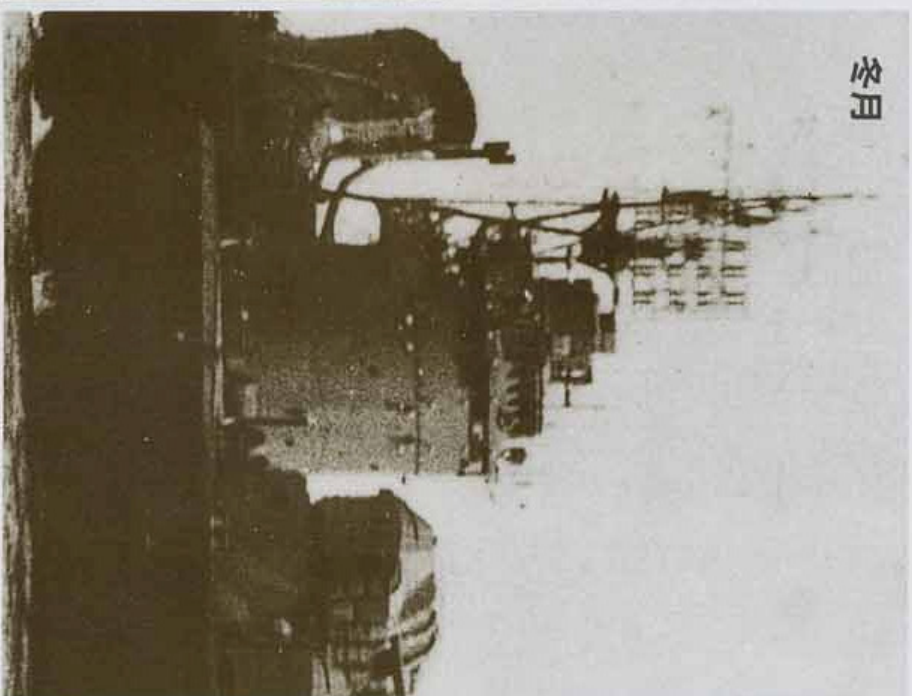
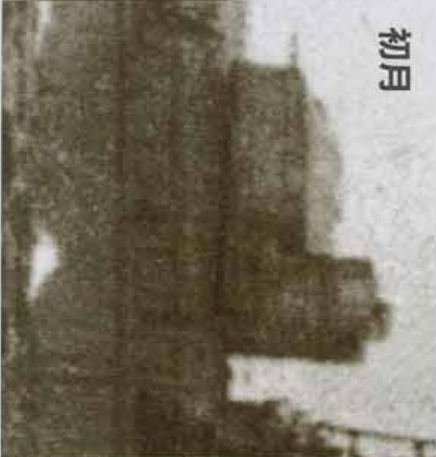
実写に見る
秋月型各艦のディテール

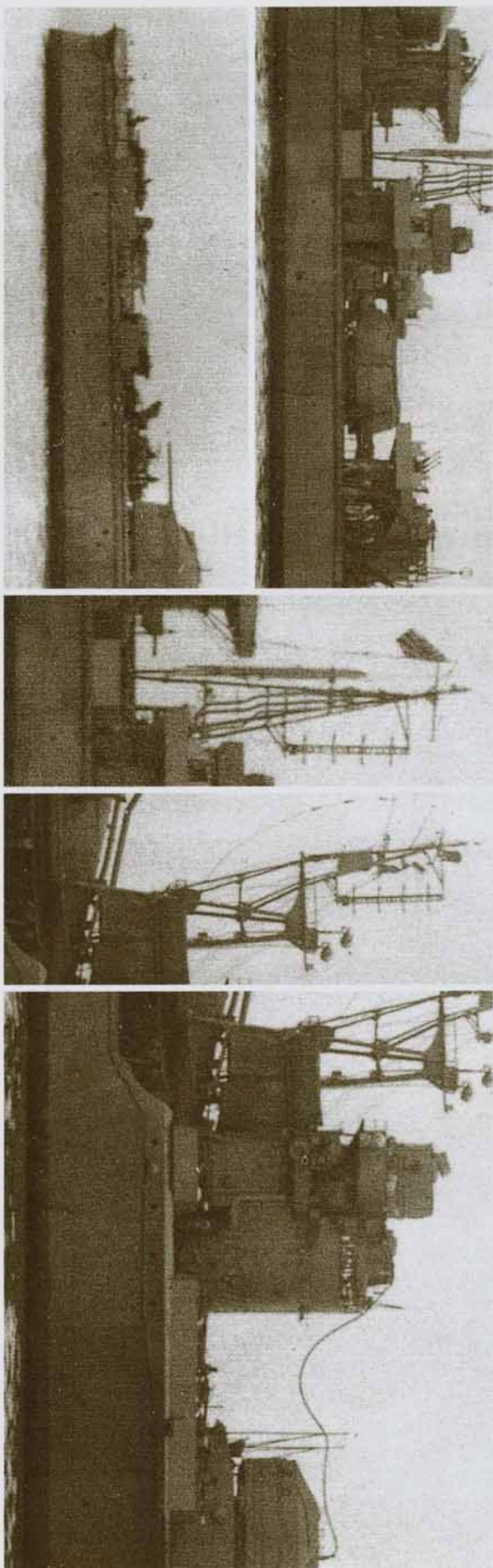
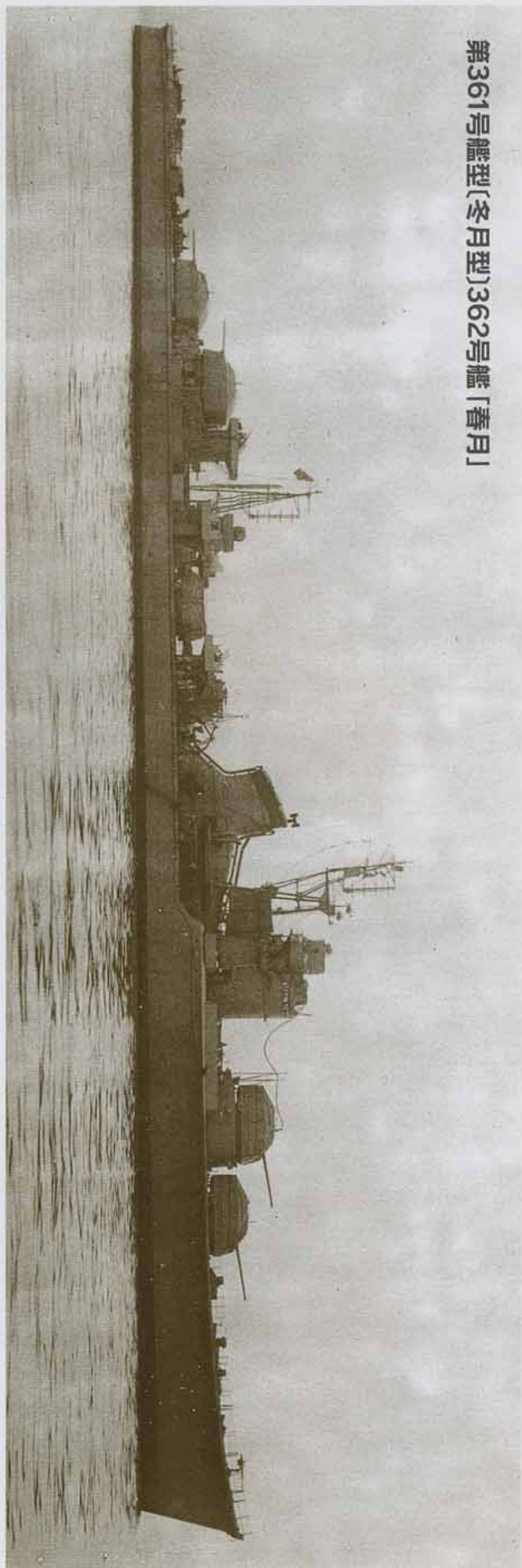
写真提供＝遠藤　昭・上農達生・H.P.S.・U.S.NATIONAL ARCHIVES
協力＝原　勝洋

終戦後、呉に碇泊する「宵月」。2番連装高角砲と機銃が撤去されている以外は本来の姿をとどめている。

第104号艦型〔秋月型〕104号艦「秋月」

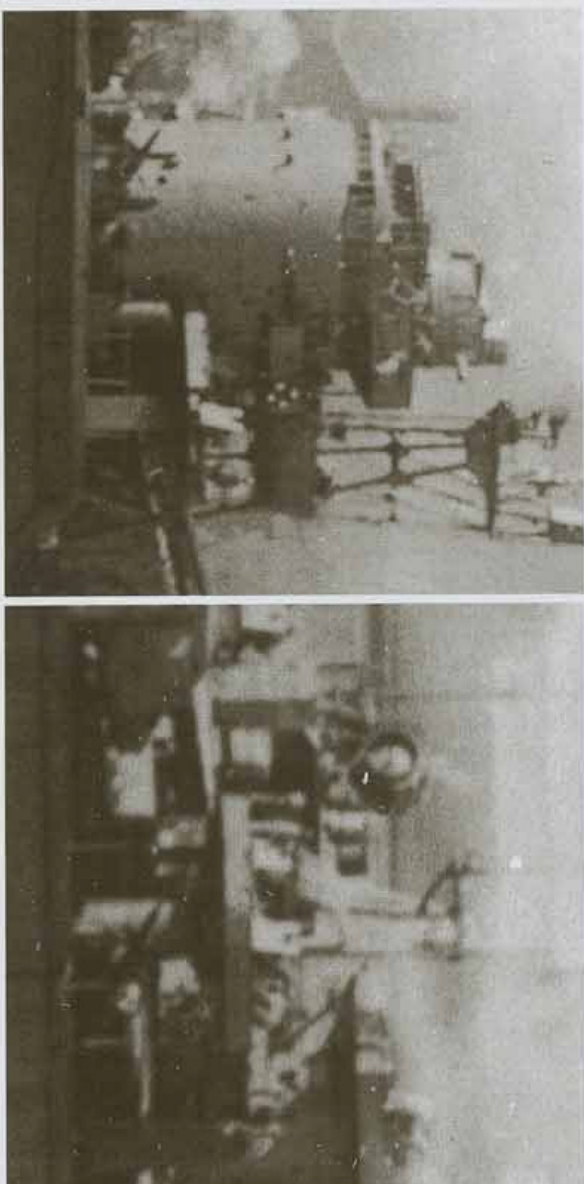
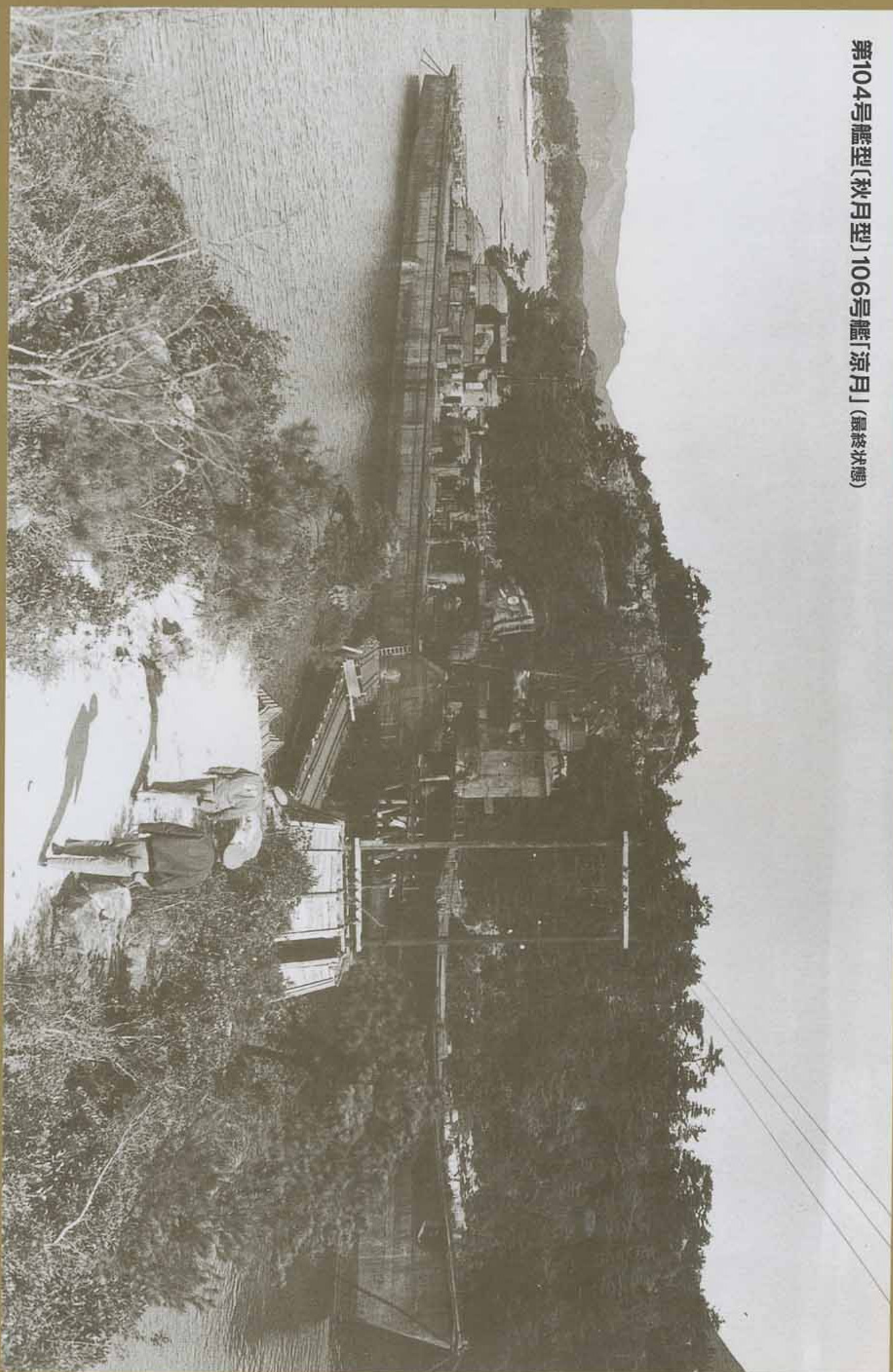
昭和17年５月中旬、公試運転中の「秋月」。空母部隊の直衛艦として、新式の65口径10センチ連装高角砲塔を前後２基ずつ配する強力な対空集中火力を備える。２番砲が背負式なので羅針艦橋の眼高確保のため艦橋構造も背が高い。

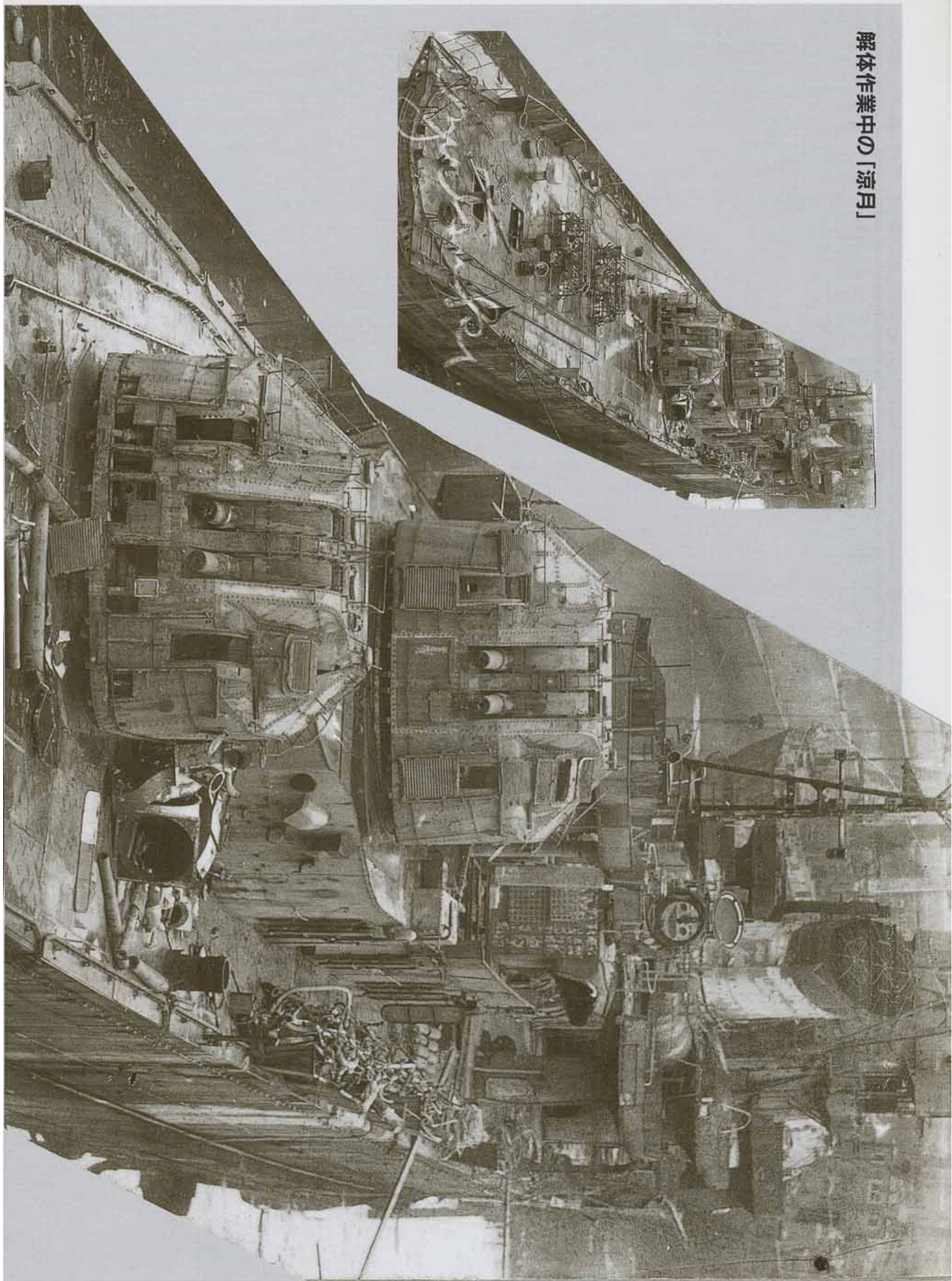
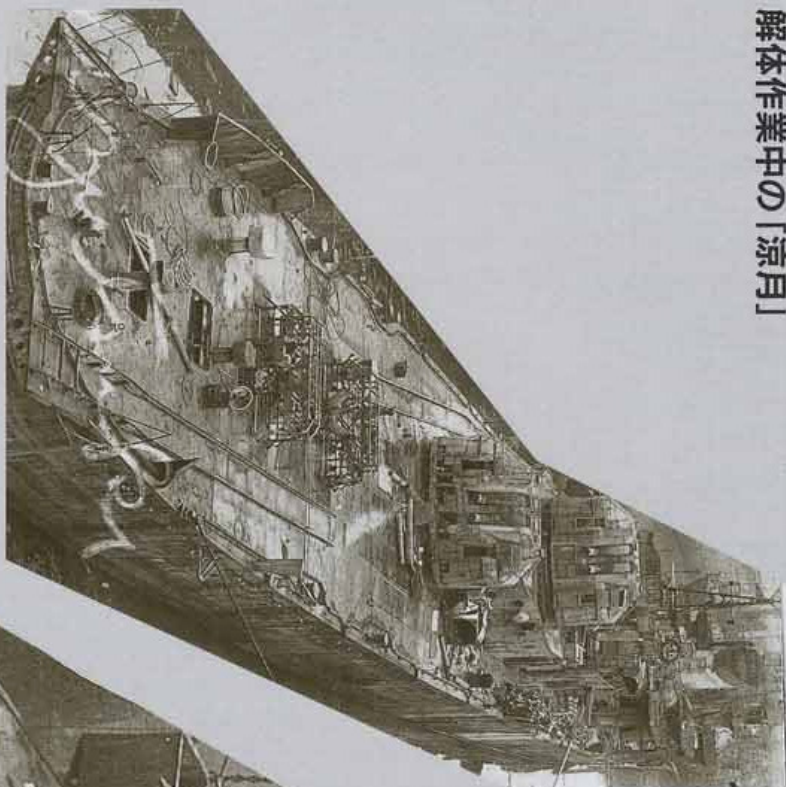
第104号艦型〔秋月型〕107号艦「初月」

「秋月・照月・涼月」に次ぐ４番艦の「初月」。本艦から前部マスト上に電探アンテナが装備された。それに伴い艦橋も九四式高射機支柱間の空所を利用して増築された。写真は17年12月の公試時だが電探はまだ搭載していない。

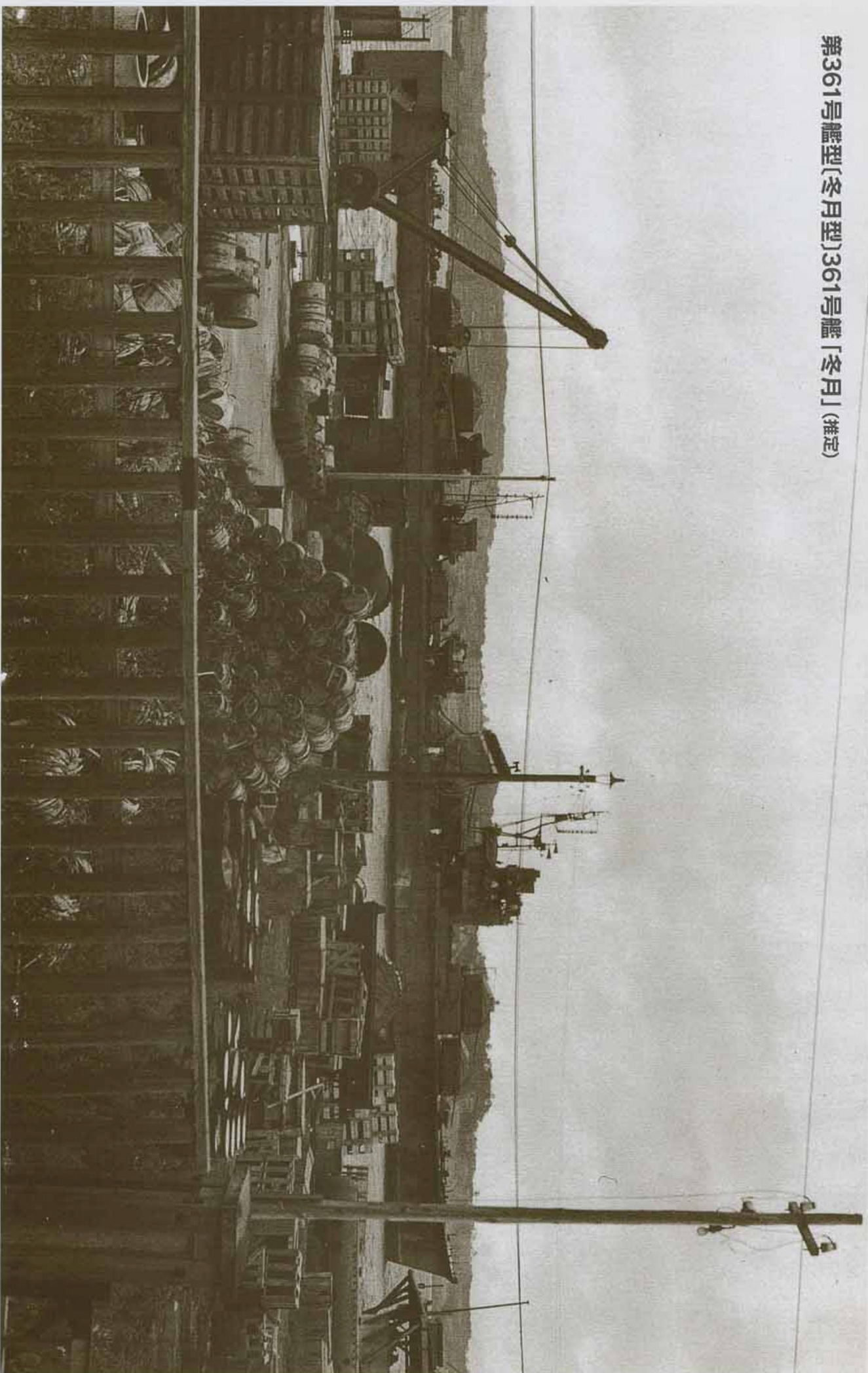
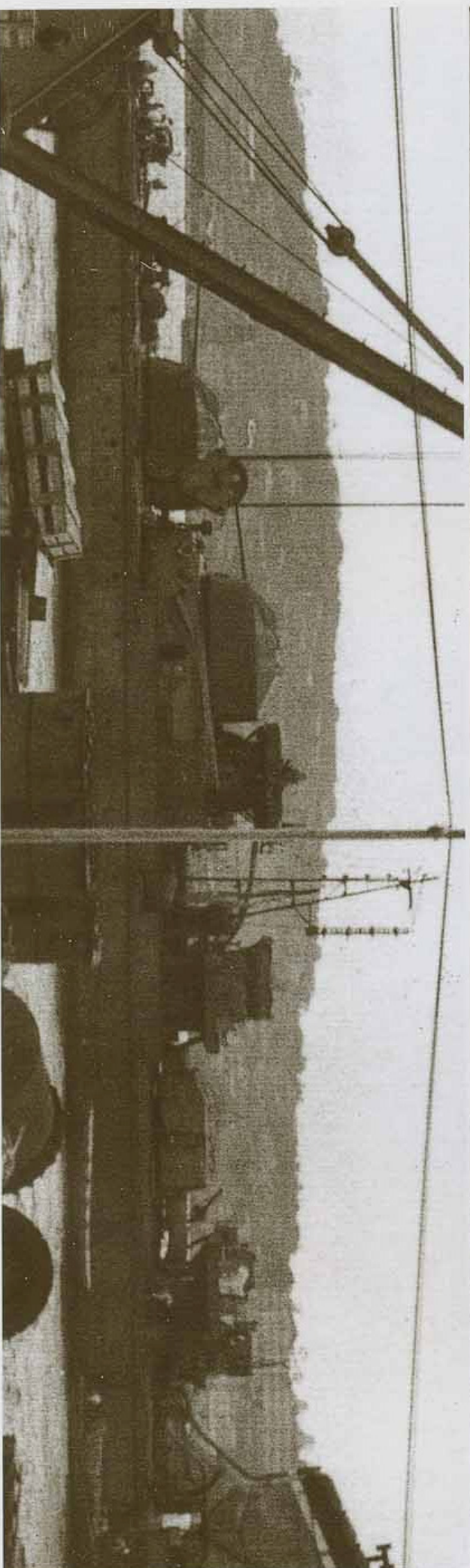
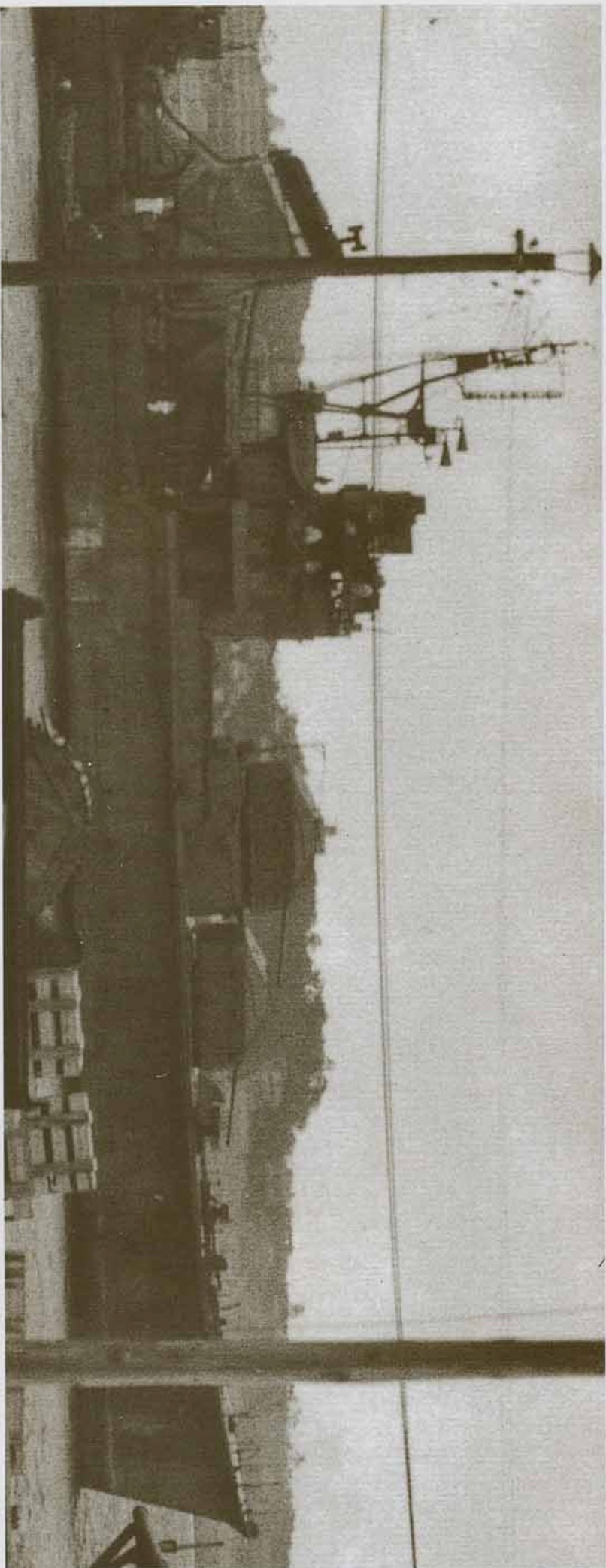
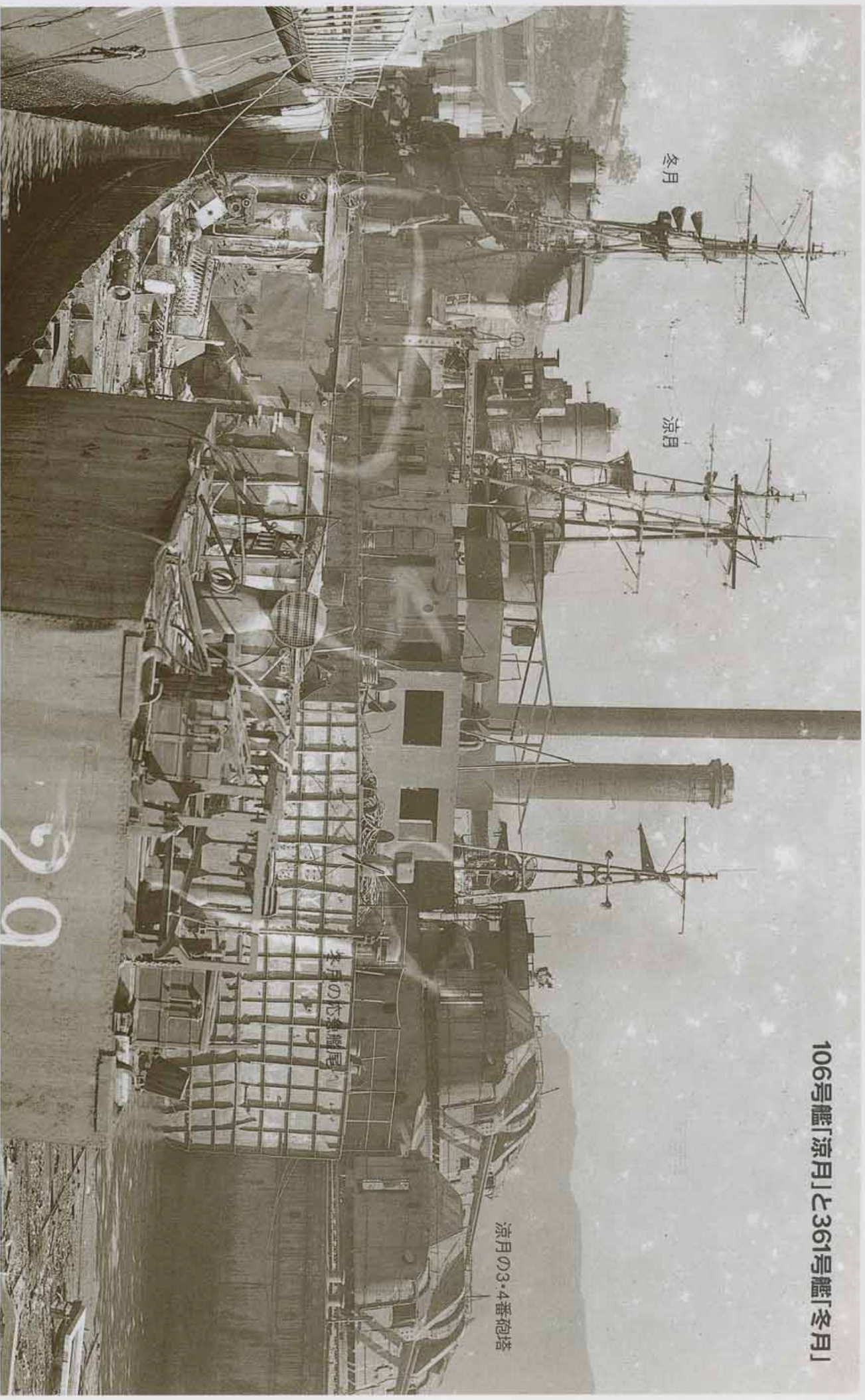
第361号艦型〔冬月型〕361号艦「冬月」

秋月型８番艦の「冬月」から船体線図が一部変更され、本艦以降は第361号艦型となった。船体形状の簡素化が進められ、船底まで直線傾斜艦首となり、船首楼甲板後半サイドラインの水はけ部も丸型から角型に変更された。

[上]「秋月」では旗甲板の下から九四式高射機を支える三脚支柱の後部側が露出して見えるが、「初月」ではその支柱が艦橋の途中から突き出して見え、艦橋後方部が拡張されたことが判る。「冬月」でも見た目のボリューム感から同様と認められる。艦橋側壁部を見ると、「初月」では羅針艦橋の床面から下方へ末広がりになっているのが判るが、「冬月」では垂直壁のように見える。前部マスト上の電探アンテナは「初月」の写真では未装備だが、「冬月」の写真では仮称二式二号一型（略称二二号）アンテナが装備されている。形状は「伊勢・日向」にテスト装備されたものと比べて正方形に近い形のものになっているが、性能改善型かどうかといった点は定かではない。
[下]「秋月・初月」の写真には後部高射機覆筒が見えるが、田村俊夫氏の調査の結果、中身の九四式高射機は装備されなかった事実が判明している。この「初月」の写真は17年12月撮影だが、17年12月22日および27日付の2枚の「初月」公式図（舷外側面及上部平面と艦内側面及艦橋諸甲板平面）では、右の「冬月」写真と同様に、25ミリ3連装機銃台に変更されている。

第361号艦型〔冬月型〕362号艦「春月」

[前頁] この「春月」の写真は20年1月20日出図の「駆逐艦春月要目簿」に添付されている新造時のもの。ちなみに「春月」の竣工は19年12月28日である。機銃は単装を主体に増強されており、舷側に単装機銃のための衝立状の防弾鈑が確認できる。電探は前部マスト中段の台座に水上見張兼射撃用の電磁ホーン式二号二型（略称二二号）、上方に小型対空用の三式一号三型（略称一三号）の各アンテナが装備され、後部マストにも一三号アンテナが装備されている。また、前部マストの一三号アンテナ上部支基の下方にはE27用逆探アンテナも認められる。艦橋旗甲板下部には兵員室と野菜庫が新設されている。兵員室は鋼鈑囲いのようだが、野菜庫はキャンバス張りのように感じられる。艦尾には爆雷投下軌条の張り出し部が見える。

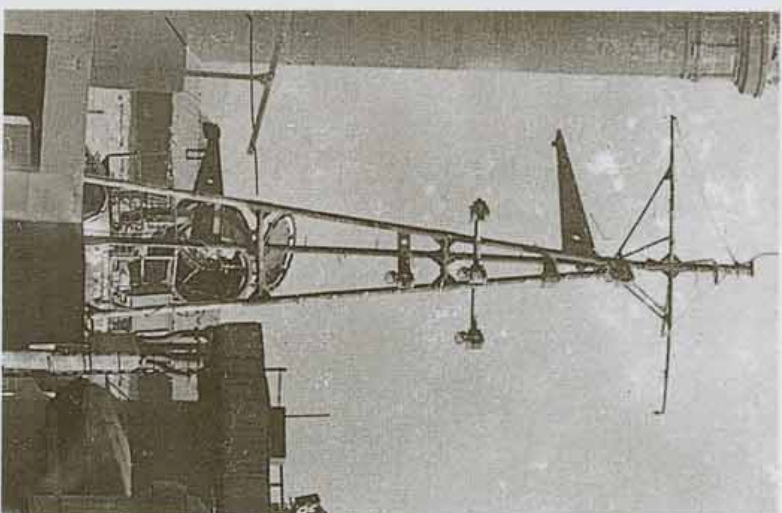
「花月」は、従来の艦型分類では満月型とされてきた。しかし、断片的資料とはいえ、例えば「367号艦（清月）線図」、「368号艦（大月）正面線図」の2図は共に361号艦型（冬月型）と明記されている。両者は冬月型船体のフレアやシーアを平面構成化した簡易構造版で、ステム（艦首）ラインはフェアリーダー部から船底まで傾斜直線で船底近くで折れ線になっている。また他の資料と突き合わせると「冬月」以降のシリーズの艦型の節目は367号艦（清月）ではないかと推定されるのである。残存写真からも「花月」は「冬月」系列と大きな違いは認められない。したがって「満月・花月」までを361号艦型（冬月型）、簡易構造を徹底したシリーズを清月型と仮称しても差し支えないのではないかと思われるのである。

第361号艦型〔冬月型〕366号艦「花月」

第104号艦型〔秋月型〕106号艦「涼月」（最終状態）

「涼月」は20年４月７日、「大和」らと共に沖縄特攻に向かう途中、米軍機の爆弾を艦橋前に受け損傷したものの自力で佐世保に帰投。後、九十九島で知られる相ノ浦の入江に防空砲台として繋留され終戦を迎えた。[上・下] の写真は終戦後米軍が撮影したものである。[下左] 写真で沖縄特攻時に被弾した艦橋前の損傷部が判る。本艦は２度にわたって米潜の雷撃を艦首部に受けその都度復旧工事がなされた。２度目の工事の際と思われるが、写真で認められるように船体艦首部や艦橋等が簡易構造化された。この構造は前述の仮称・清月型に準拠したものと推定される。

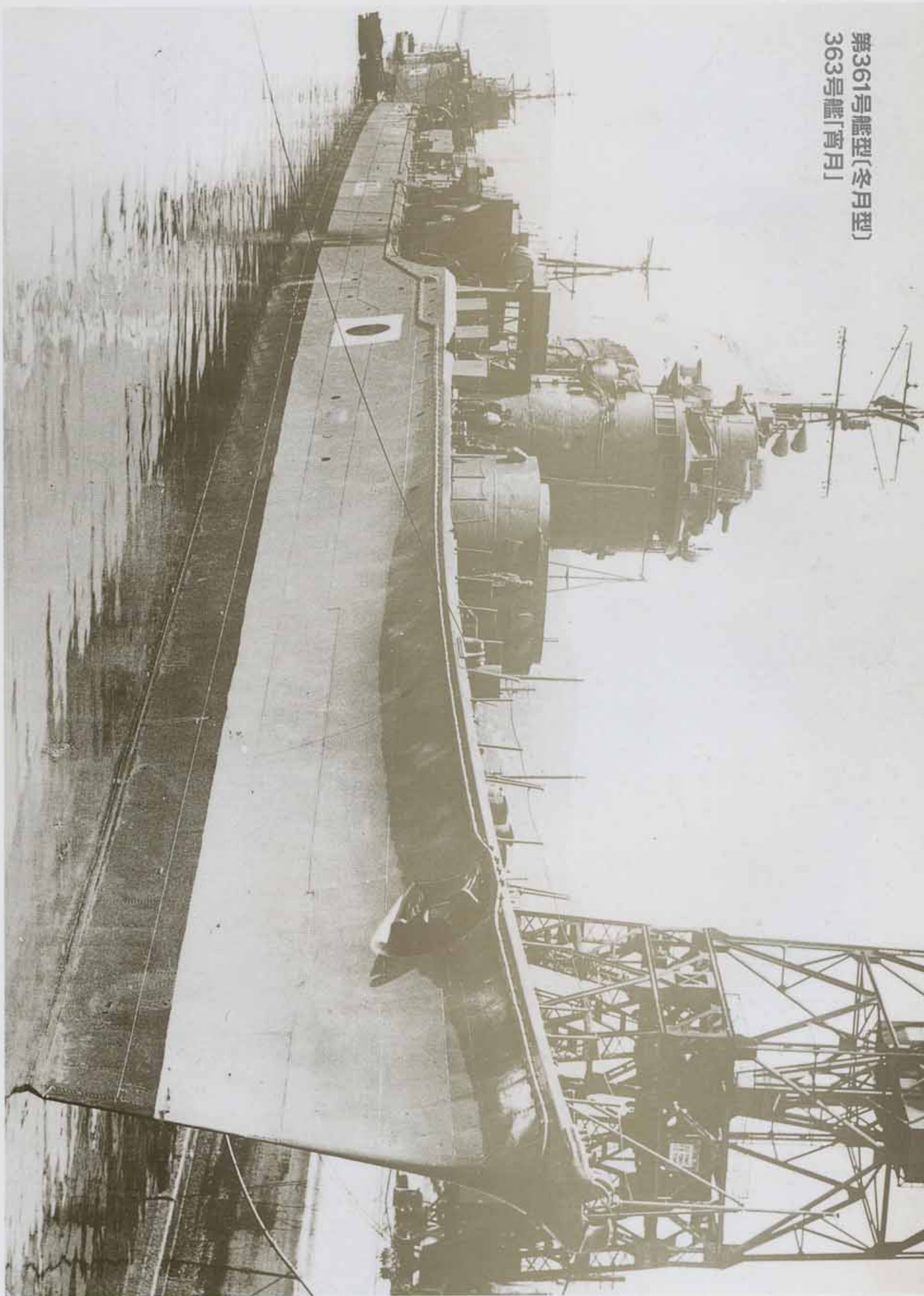
解体作業中の「涼月」

［上］秋月型の主砲である10センチ連装高角砲のシールドは独特の形状で、イラストで正確に描かれているものは少ないが、この写真で特徴の一端が把握できるといえよう。細かい事だが後部マストの一三号電探アンテナの上部支基は三角の板状で、取り付け角度が左側にオフセットされているのが見える。
［下］もっとも貴重な情報は、爆雷投下用軌条の詳細が明瞭に判ることであろう。艦尾ぎりぎりの所に三つ見える支柱付きの斜め棒は、艦内に発煙器室があることから煙幕用の発煙噴射管と思われる。蓋が外された四角い二つの穴は下部の舵取機室の点検用ないし交換パーツの出し入れのハッチであろう。左舷舷側の衝立は単装機銃の防弾鈑だが、米機の12.7ミリ弾を防げるだけの鈑厚であったかは判らない。あるいは至近弾の弾片よけと機銃員の転落防止を兼ねたものかもしれない。爆雷装填台やＹ字型の投射機の様子もよく判る。

第361号艦型〔冬月型〕361号艦「冬月」（推定）

この写真には「1945.9.15、門司港、照月級」というデータしかないが「冬月」か「夏月」であることは間違いない。後部マストの一三号アンテナ上部支基など細部に「夏月」と明確に異なる部分がある点から「冬月」と判断した。

しかし、「冬月」とすると、同艦は昭和20年8月20日に触雷し艦尾切断しているので「9月15日」という日付が問題となる。この日付が写真の撮影日なのか米海軍担当部署が情報資料を受理登録した日なのかがポイントであろう。

「冬月」が被雷後に艦尾を応急修理したことは知られているが、それがほんの間に合わせ修理に近いことがこの写真で初めて判った。応急艦尾に「ＦＵＹＵＺＵＫＩ」のローマ字が読める。本艦は特別輸送艦に分類後、工作設備の工事がなされ門司を基地としてB29が投下した機雷の掃海部隊を支援した。その後、「冬月」は佐世保へ回航され「涼月」と共に繋泊された。写真はその時期のものであろう。

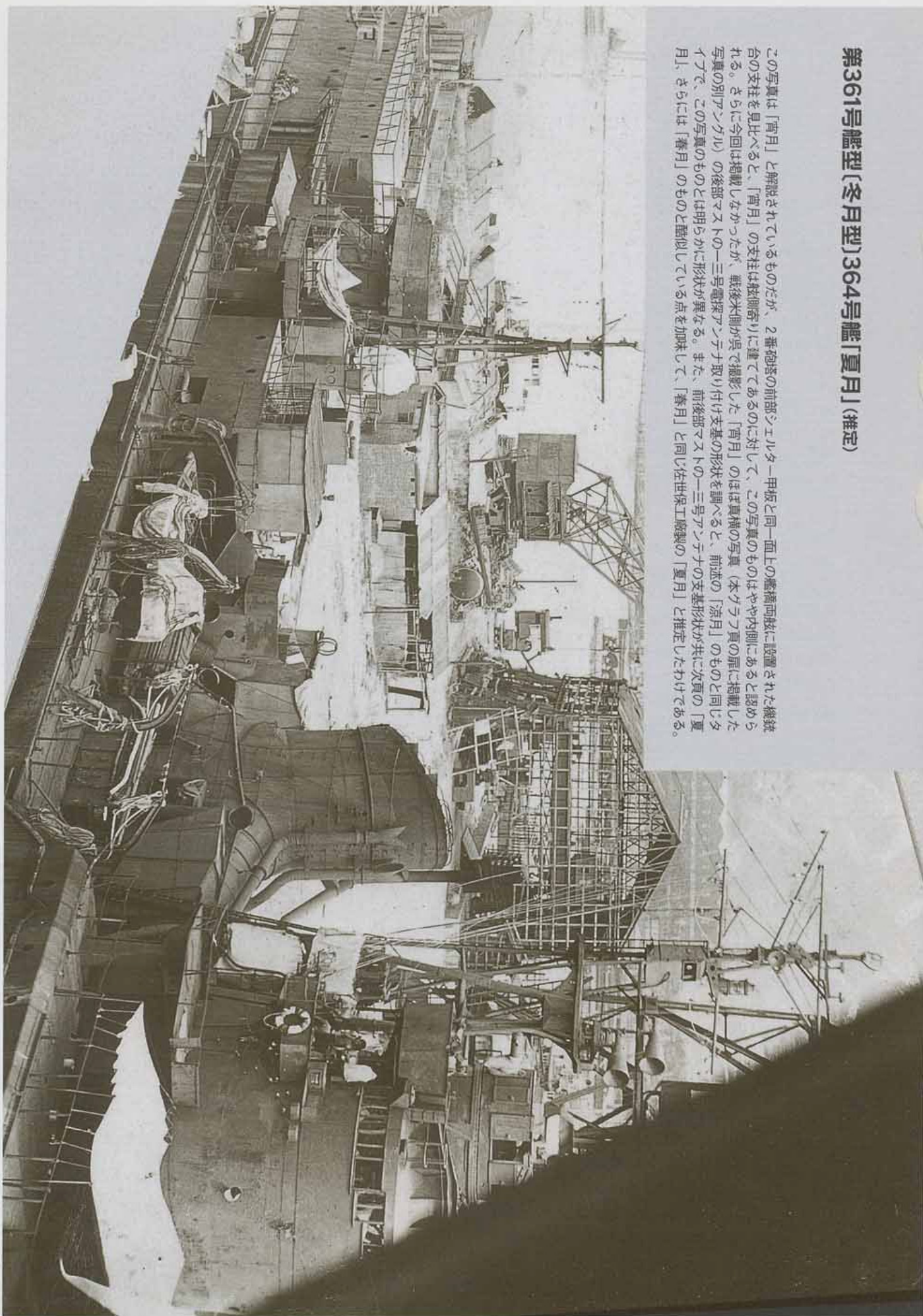
冬月

涼月

冬月の後部マスト

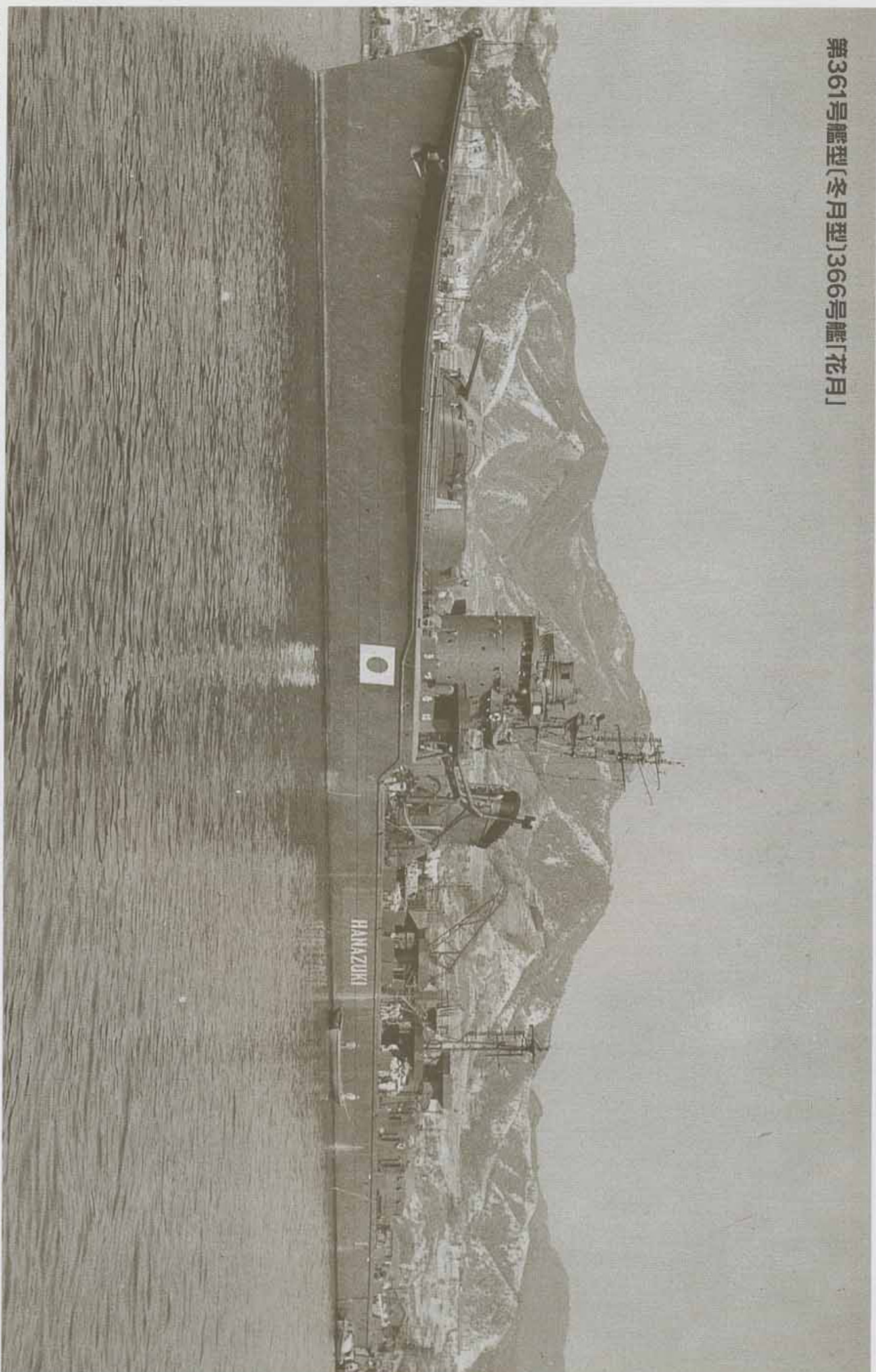
[左]「冬月」は特別輸送艦に改装される時に兵装はすべて撤去されたため艦橋トップの高射機はその時からない。細部に目をやると前部マスト中段の電探アンテナ取り付け台の形状が「冬月」と「涼月」では違うように見える。「冬月」は二一号アンテナから二二号アンテナに換装する際、台座も替えたのかもしれない。限られた範囲しか写っていない写真だが、秋月型をテーマにする研究者やモデラーが見ると多くの情報が読み取れるであろう。
[上]は「涼月」の後部マストであるが、長い三角形状の一三号アンテナの取り付け支持桁が見える。このような板材のタイプは「涼月」と「宵月」だけてあるようだ。他艦は桁材と斜めの支え材の構造がほとんどである。後日の追加装備と新造時からの正規装備の違い、あるいは担当造船所ごとの違いといった事があるのかもしれない。そうした微細な相違をチェックしていけば、1艦ごとにどこかが違うといわれる秋月型も、その特徴がだいぶ判りやすくなるのではないかと思う。

第361号艦型〔冬月型〕
363号艦「宵月」

この写真のもたらす最大の情報は、艦首ラインが水線下で折れ線（ナックル）になっていることである。図面から「冬月」と「春月」は船底まで直線であることが判っている。その他の冬月型が「宵月」と同じなのか、それとも唯一浦賀船渠建造の「宵月」だけかは謎である。

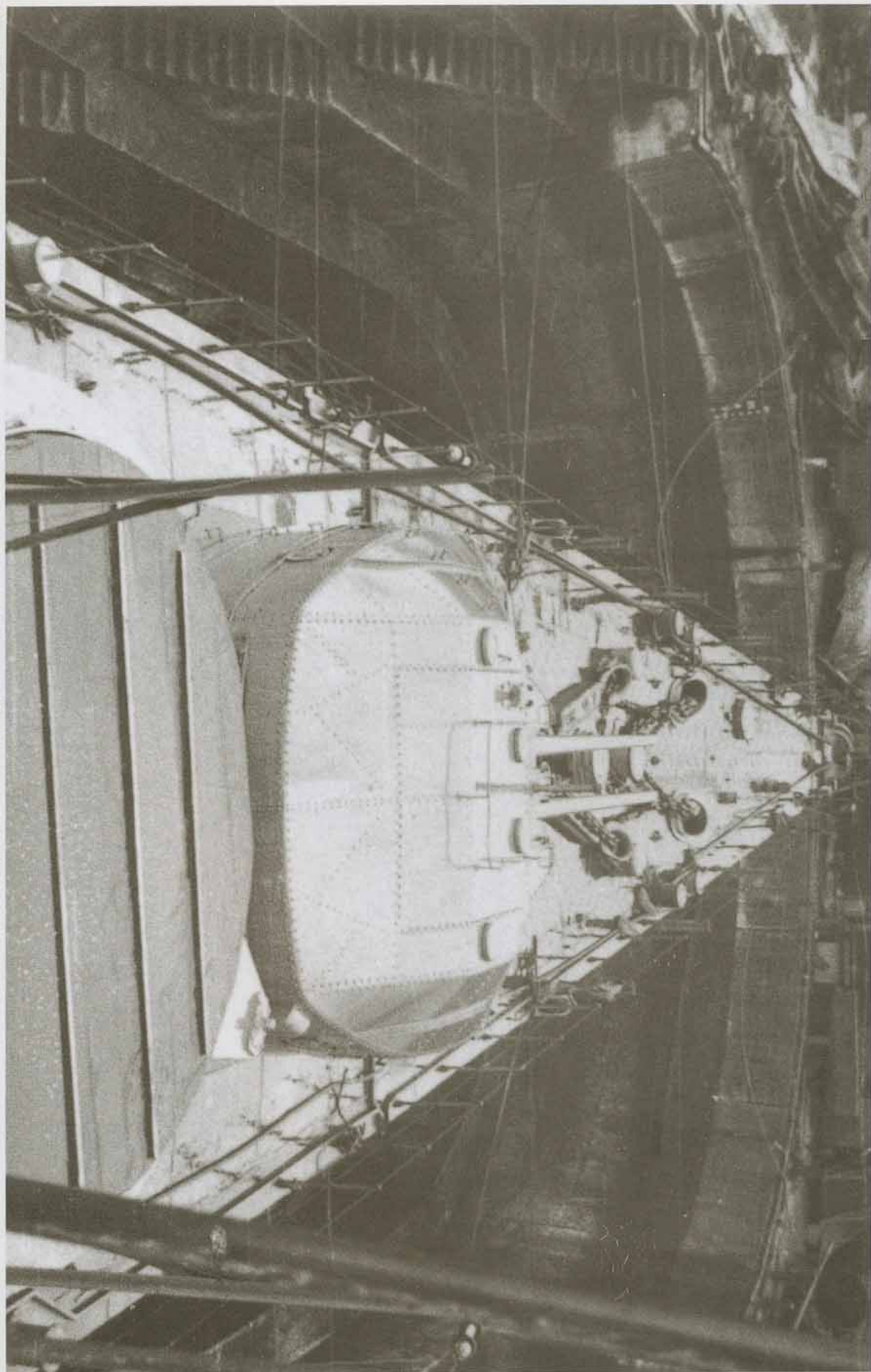
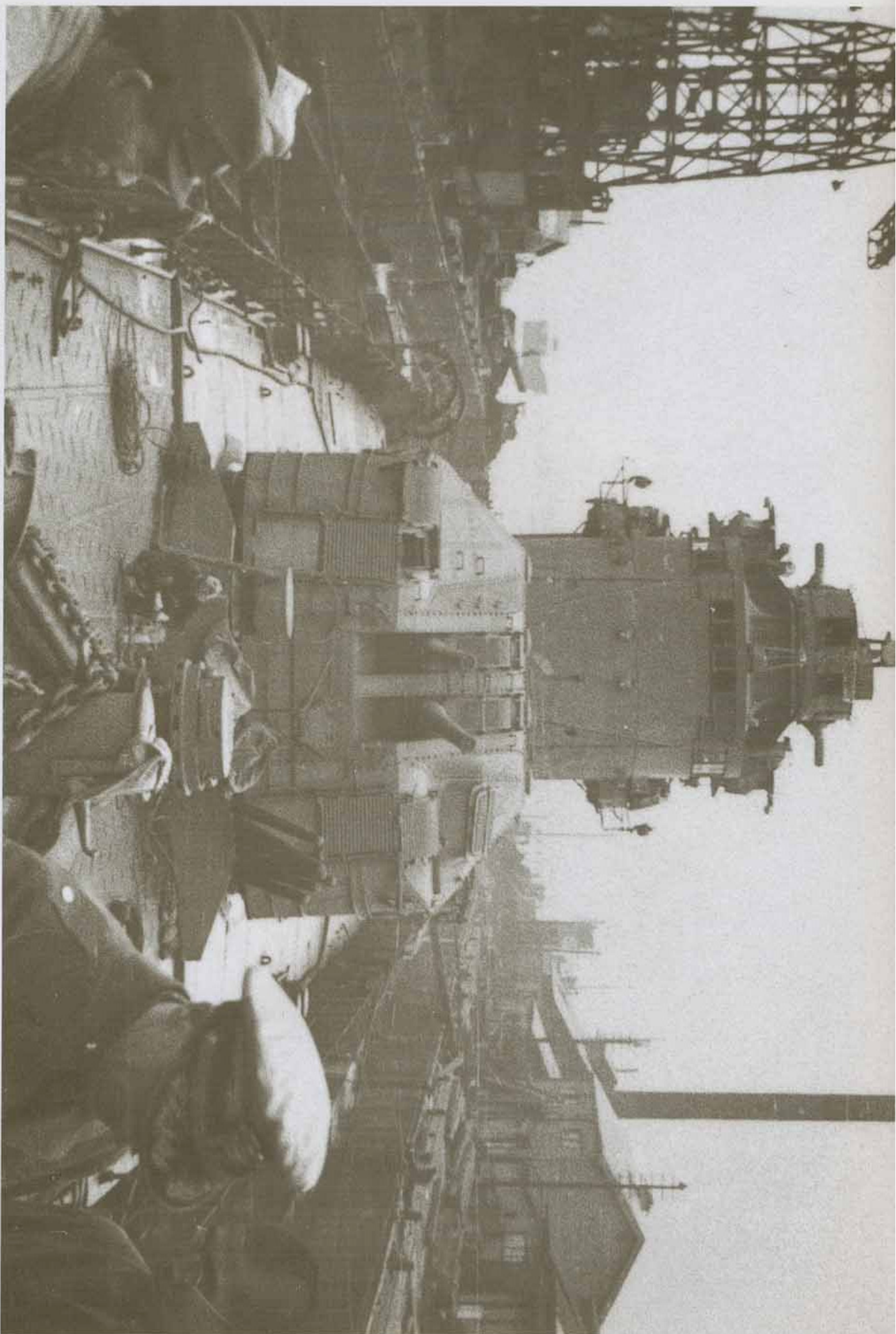
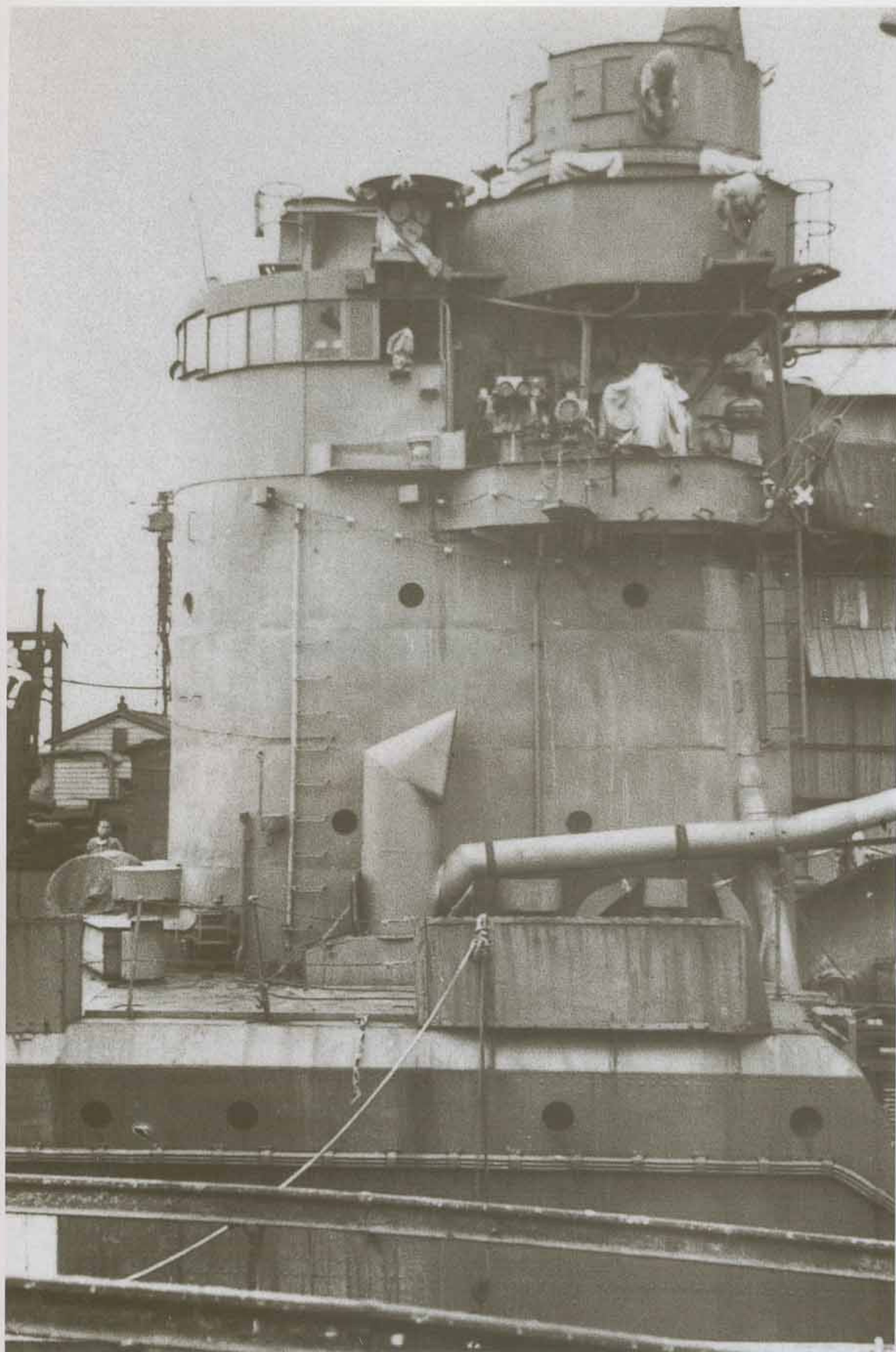
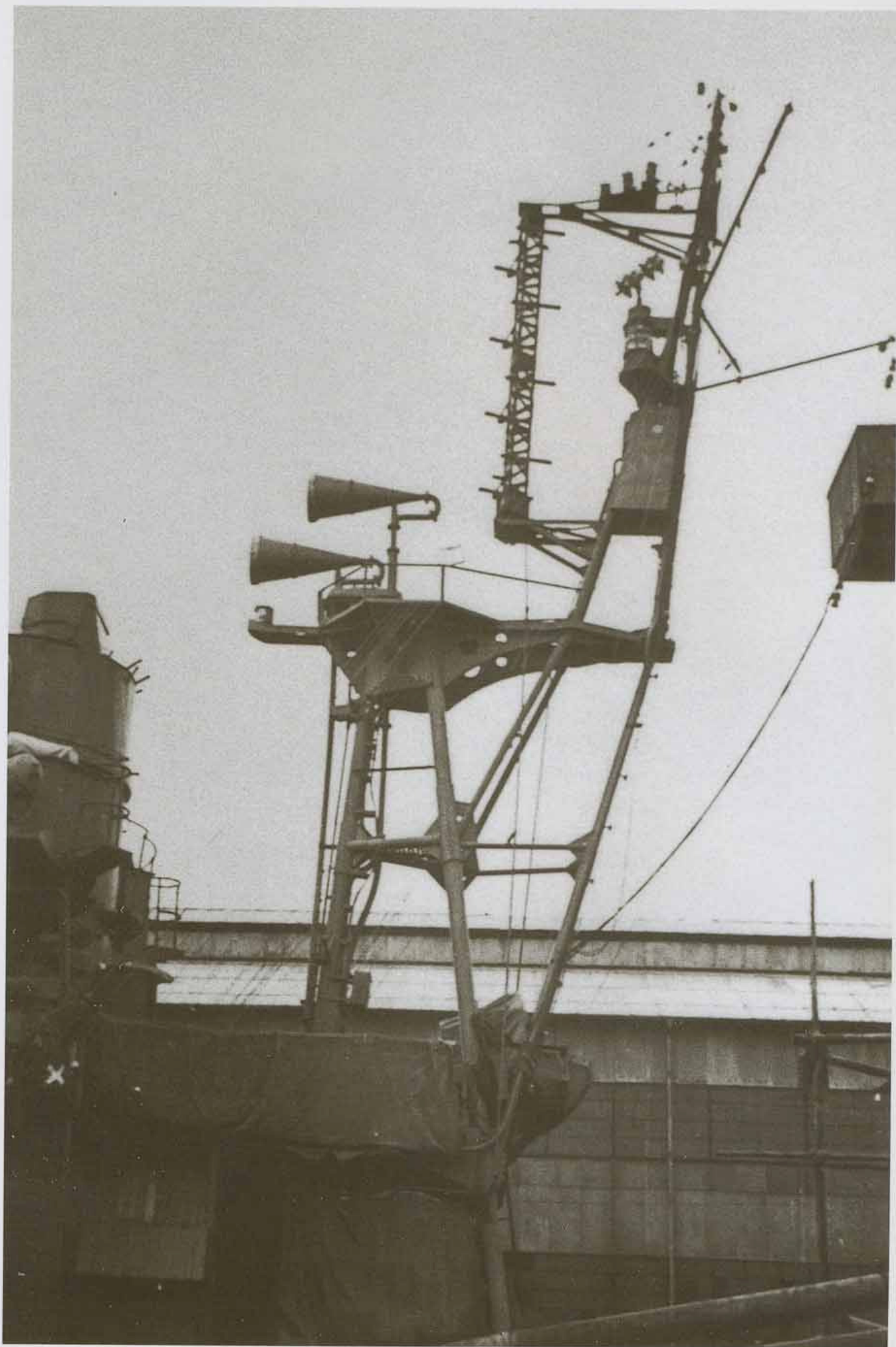
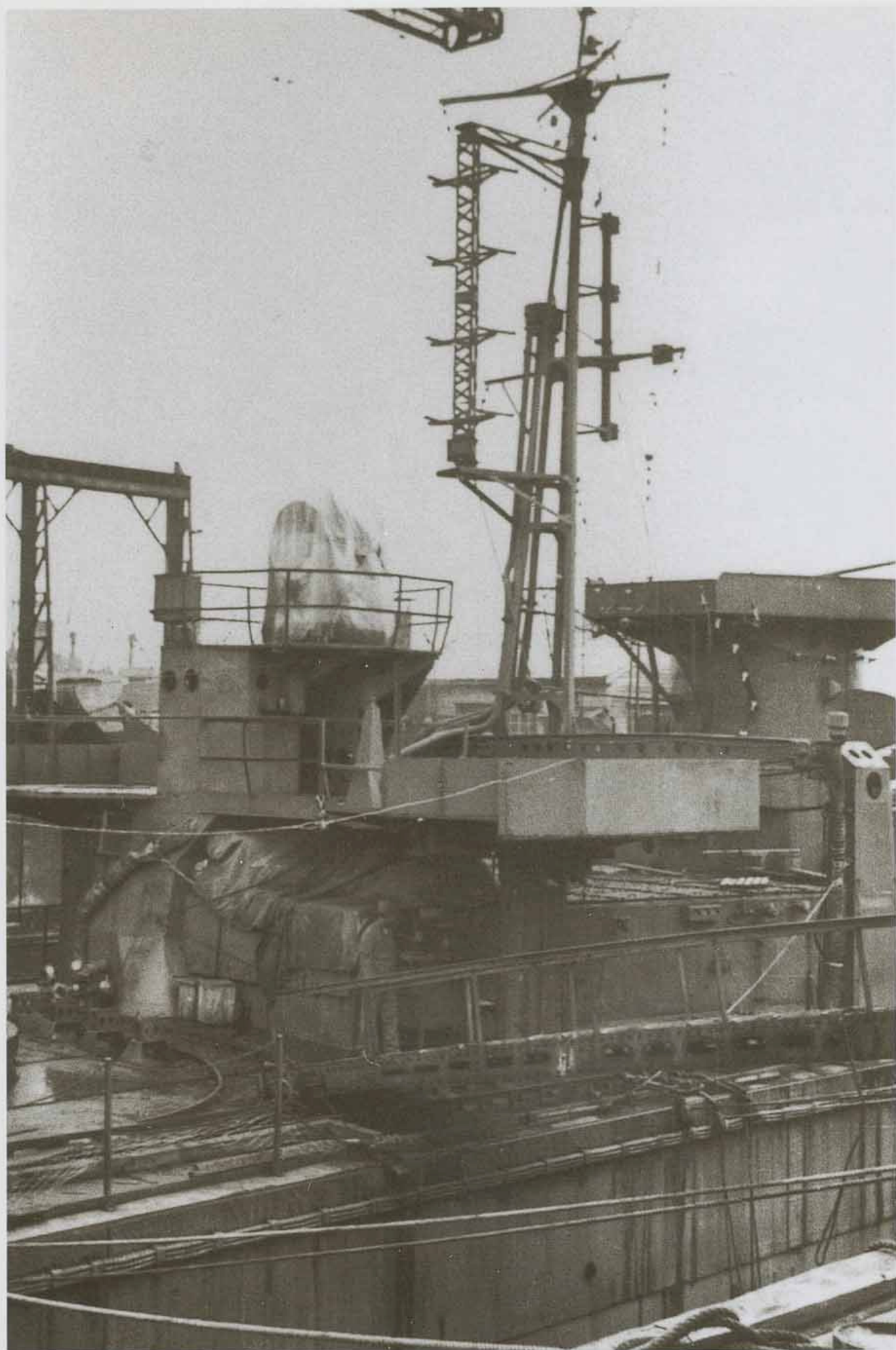
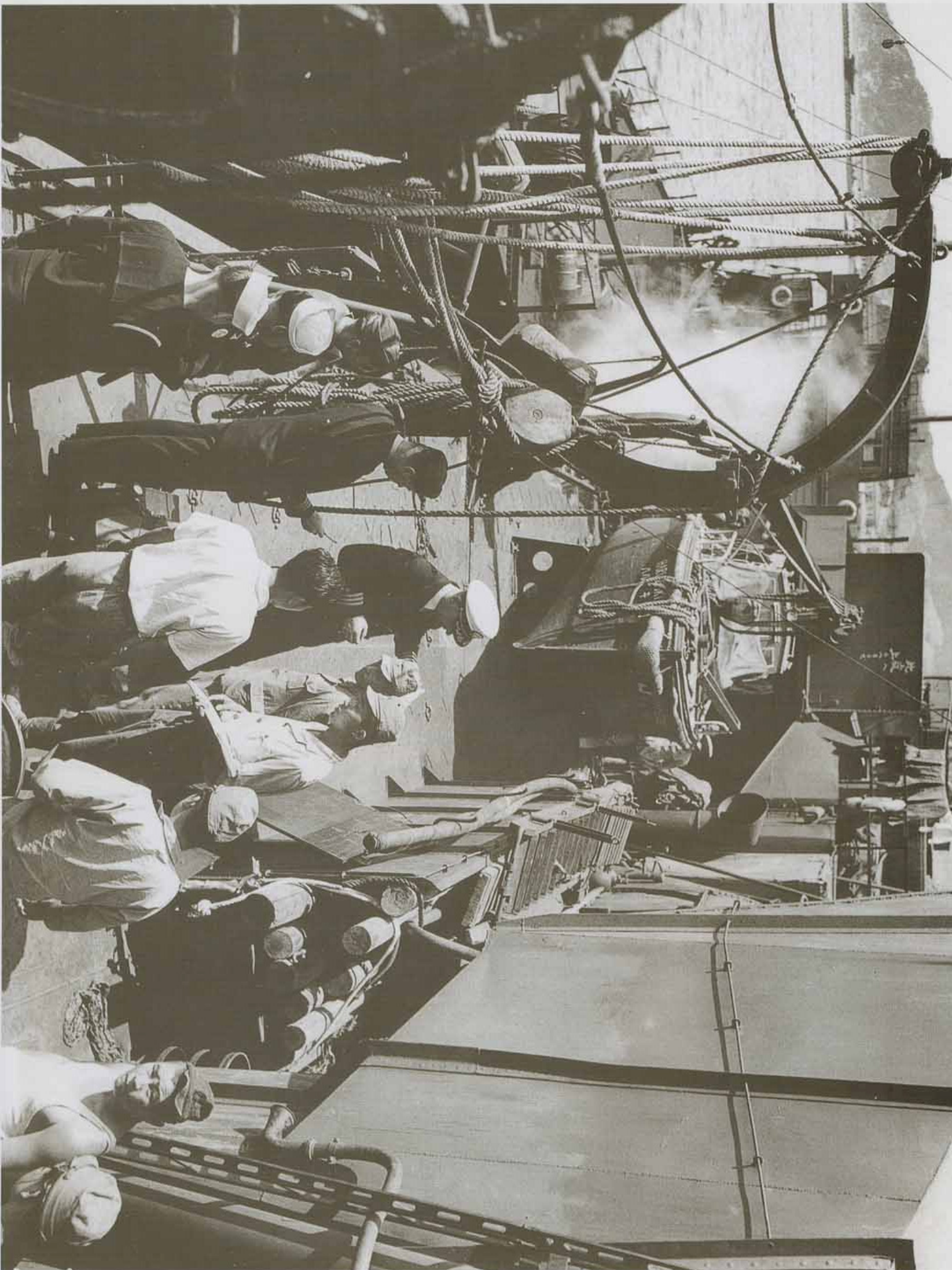
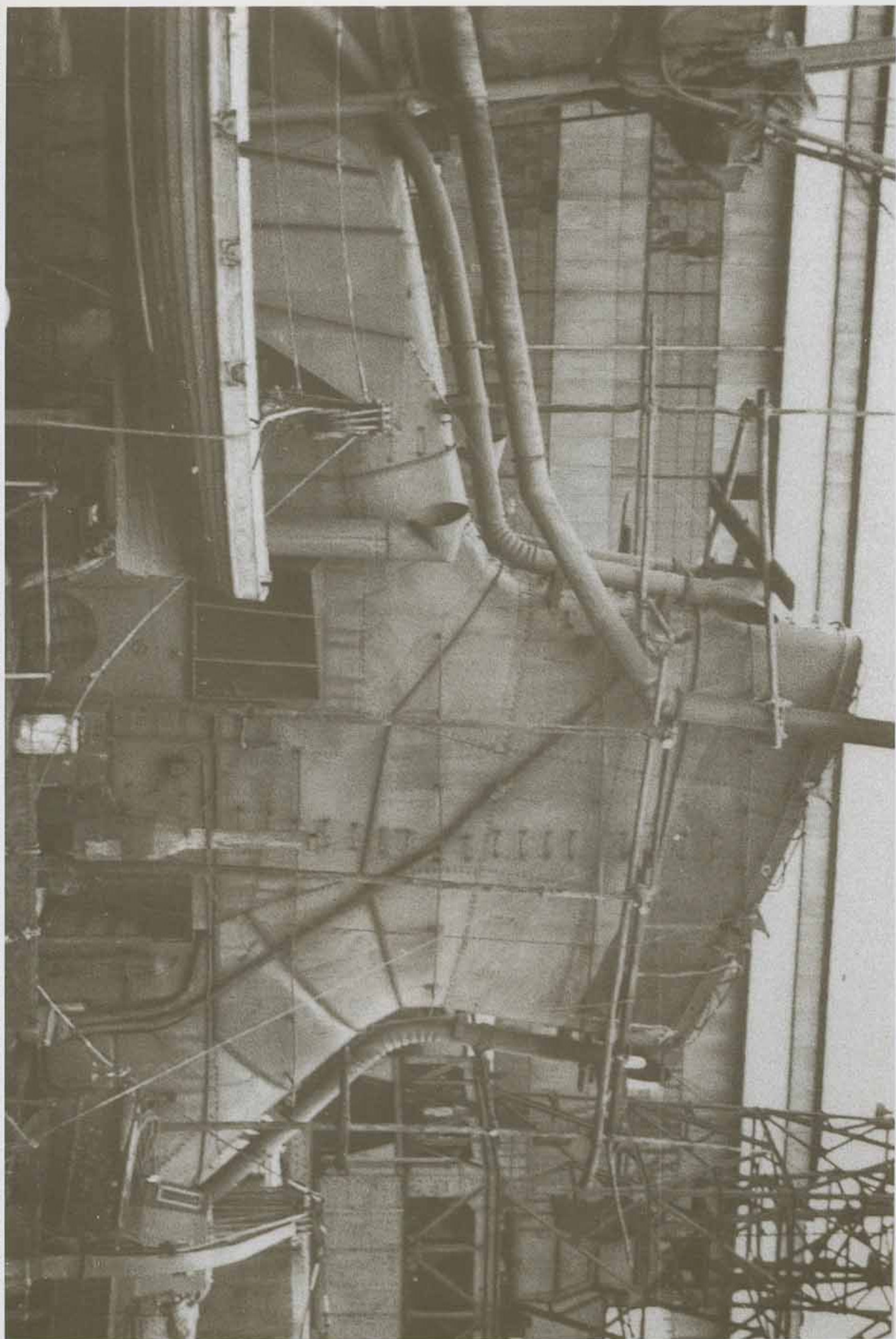
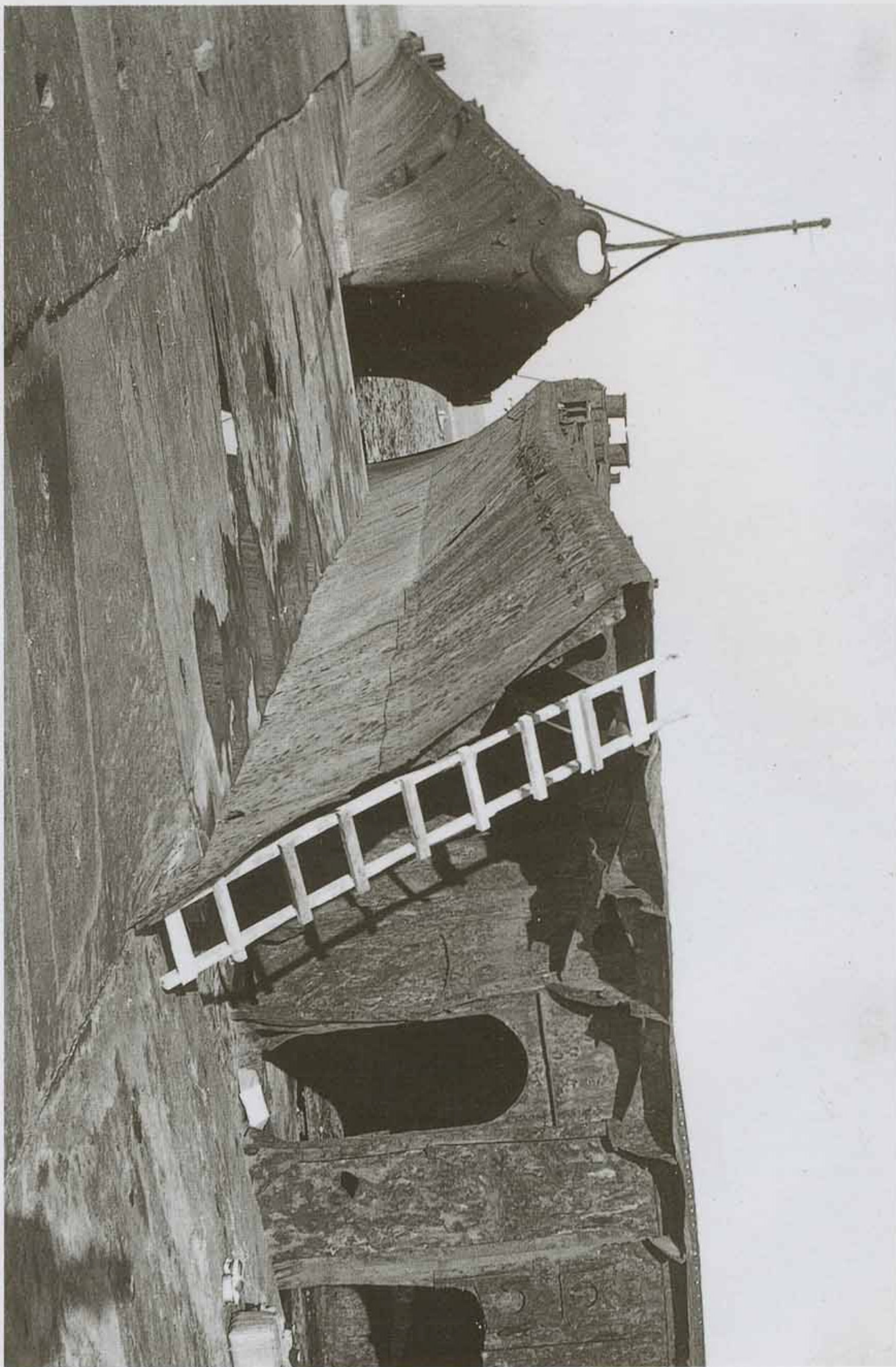
第361号艦型〔冬月型〕364号艦「夏月」（推定）

この写真は「宵月」と解説されているものだが、２番砲塔の前部シェルター甲板と同一面上の艦橋両舷に設置された機銃台の支柱を見比べると、「宵月」の支柱は舷側寄りに建ててあるのに対して、この写真のものはやや内側にあると認められる。さらに今回は掲載しなかったが、戦後米側が呉で撮影した「宵月」のほぼ真横の写真（本グラフ頁の扉に掲載した写真の別アングル）の後部マストの一三号電探アンテナ取り付け支基の形状を調べると、前述の「涼月」のものと同じタイプで、この写真のものとは明らかに形状が異なる。また、前後部マストの一三号アンテナの支基形状が共に次頁の「夏月」、さらには「春月」のものと酷似している点を加味して、「春月」と同じ佐世保工廠製の「夏月」と推定したわけである。

第361号艦型〔冬月型〕364号艦「夏月」

昭和20年10月16日、呉において米軍が撮影した「夏月」。2、3番連装高角砲塔と機銃は撤去されているが電探アンテナは完備しており、本艦の最終状態をよくとどめる貴重な写真である。

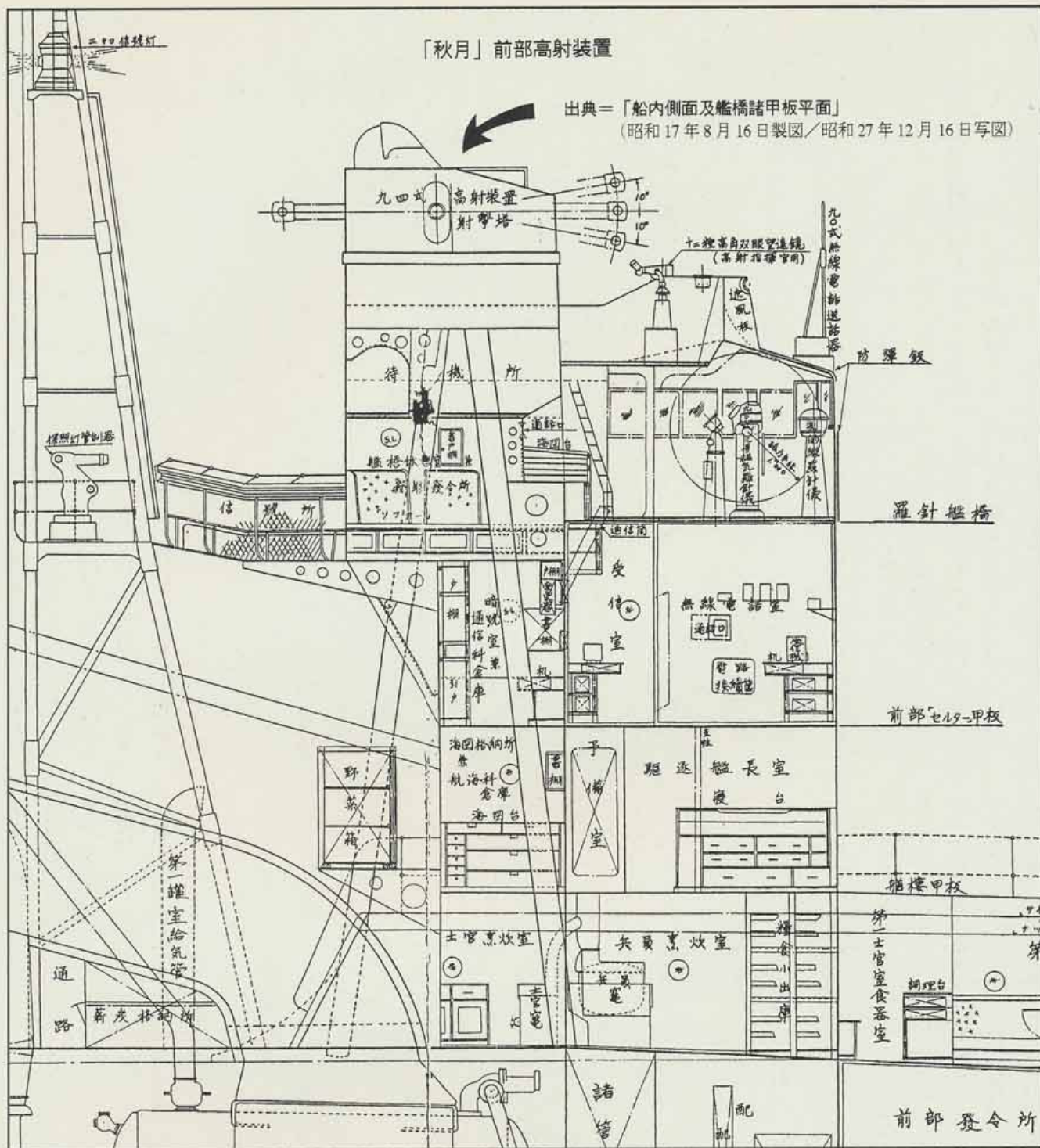
第361号艦型〔冬月型〕366号艦「花月」

「花月」は船首楼のシーアを直線化するなど簡易構造化を進めたといわれるが、この写真および今回未掲載の右舷真横から撮ったマゼンタ色に退色したカラープリントを見てもシーアラインに限り冬月型と相違ないと認められる。

特別輸送艦時代の「春月」。撮影は昭和21年10月15日、呉でサイゴンに向け復員輸送任務に出航するための給油中のシーンである。本艦はその後、翌年８月25日にソ連への第３次引き渡し艦として佐世保からナホトカに向かった。

艦橋から見下ろした前甲板。操艦する際、前方視界がどのようなものかを窺い知ることができる。高角砲シールドを後ろから見ることができる写真はこれ以外にはない。

これも高角砲シールド、甲板の波よけ、側面が垂直壁の艦橋などのディテール情報が豊富な写真である。

艦橋周りのディテールもさることながら、船首楼甲板舷側部の水はけ用の角型面取り部分の形状が明瞭に判るのも魅力。

前部マスト（前檣）の組み立て構造が明瞭に判る。電磁ホーン式の二二号電探アンテナの据え付け台は、もとは大型の二一号アンテナ用なのであろう。

残された公式図だけでは形状が完全に把握しにくいのが後部マストであるが、この写真が理解の助けになりそうである。

右舷一缶給気筒（右端）付近。丸太を置いた所が応急器材格納筐で上に舷梯が置いてある。中央は九メートル内火艇。甲板は鋼甲板になっている。

煙突の前後に沿う管は缶（かま＝ボイラー）の蒸気捨管。１本だけ離れて煙突上方に向かうのが烹炊所の煙突。搭載艇と煙突間のダクトが左舷１缶給気筒。艇尾付近の四角い開口部が左舷２缶給気筒。その右下が通り抜けの通路。

福岡県若松港の防波堤にされた「冬月」(左)と「涼月」(右)の各船体。ことに「涼月」の撮影構図は簡易化構造の船体を示す絶好の角度で、甲板シーアや舷側フレアがほとんど平面で構成されているのが実によく判る(撮影=朝長溶)。

米海軍の識別資料『ＯＮＩ 41-42』に載った新型駆逐艦（秋月型）。Ｂ17撮影の写真があるためか、艦型の把握はかなりのものである。

「秋月」前部高射装置

出典＝「船内側面及艦橋諸甲板平面」
（昭和17年8月16日製図／昭和27年12月16日写図）

なぜか実物の見えている部分の形状を表わす実線ではなく、中心線または基準線を表わす時に使う一点鎖線で描かれ、その形状も前部よりも簡単に描かれている。

しかし、「秋月」の『要目簿』には、射撃指揮装置として「九四式高角装置防振台付（一〇糎高角砲用）二組、四米半高角測距儀二組」と記載されている。なぜ一組しか装備していなかった機器を、『要目簿』にこのように二組と記載したのか。その理由が判らないと、公式資料である『要目簿』記載の数値が優先的に取り扱われることにより、公式には二組装備という数字が今後も生き続けることになるのである。

この解答は、「秋月」の竣工直後に舞鶴工廠に赴任したという和田猪一氏（技術大尉。東大［造船］昭和一六年卒。戦後、海上自衛隊入隊、海将補で退職。東京都文京区在住）からいただいた手紙の中にあった。それには、和田氏が一七年六月二〇日頃、舞廠造船部に着任したことや「秋月」のことについて、当時の「後日装備」や『要目簿』との関係、あるいは公式図の写図について、疑問の解答となることが述べられていた。

和田氏によれば、

「秋月」後部高射装置

出典＝「船内側面及艦橋諸甲板平面」

（昭和17年8月16日製図／
昭和27年12月16日写図）

「当時、造船部や造機部と違って造兵部関係の装備品は機雷関係以外は民間会社で作られるのが大半であり、民間会社からの納入品が来なければ代策を採ることは不可能だった。装備品の納入が遅れるか納入の目処が立たない事態になれば、艦艇の完成期日を遅らせるか、後日装備ということにして装備品を載せないで引渡すか、いずれかになる。防衛庁でも後日装備ということがあったようだが、これは予算不足から生じる現象で昔の後日装備とは中身が違うものと思う。

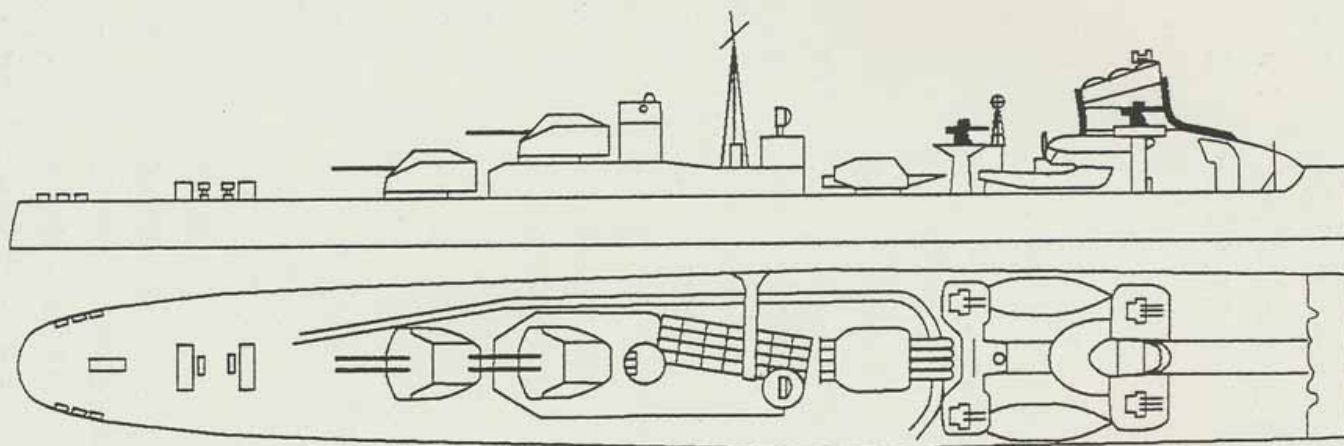
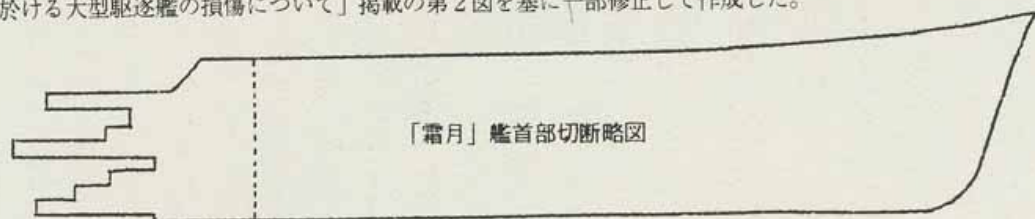
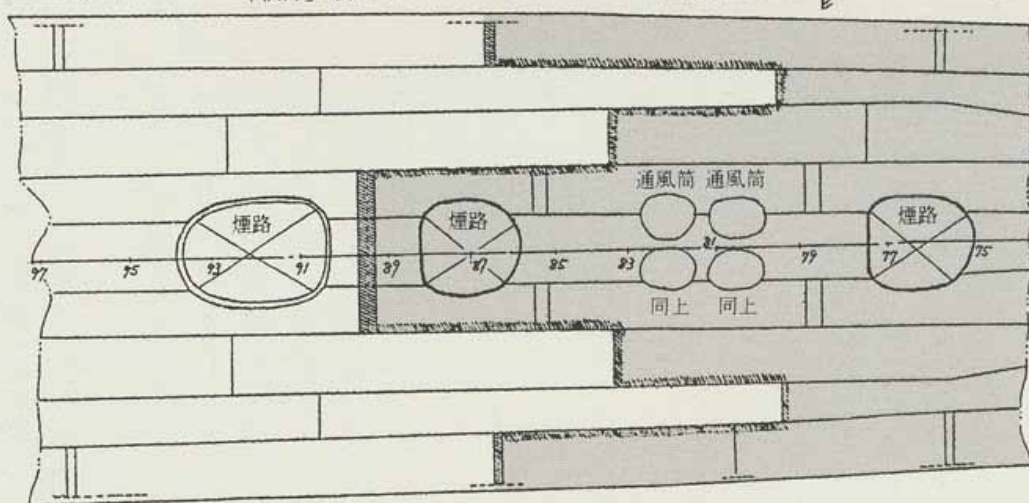
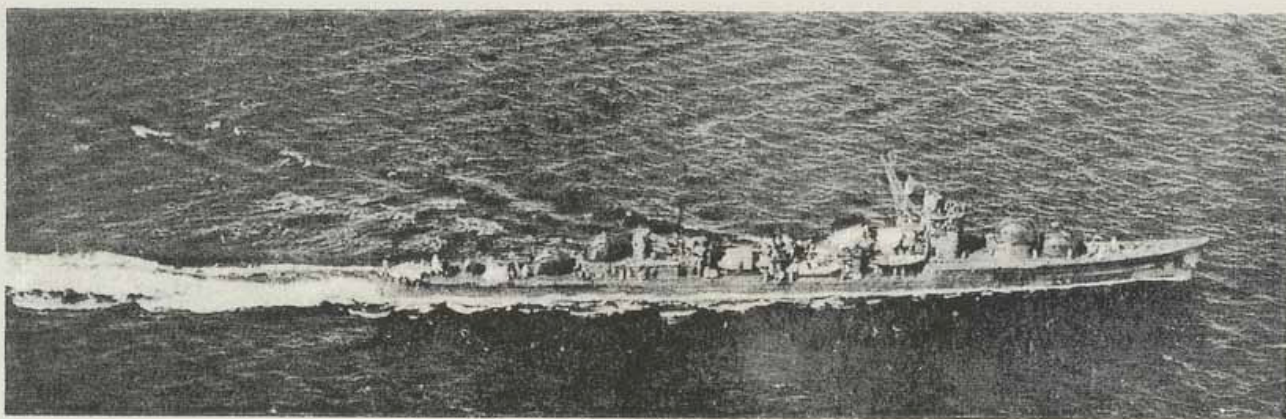
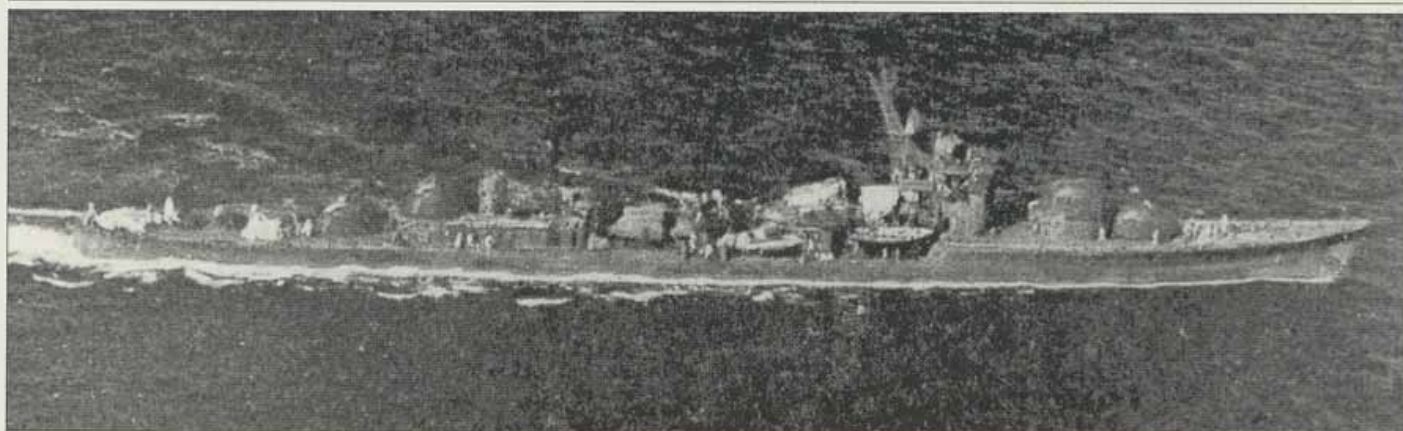
後日装備にするかしないかは、艦艇を作っている工廠の責任ではない。したがって、担当する部門の関係者の記憶に残るような事態でなかったことも十分に考えられる。

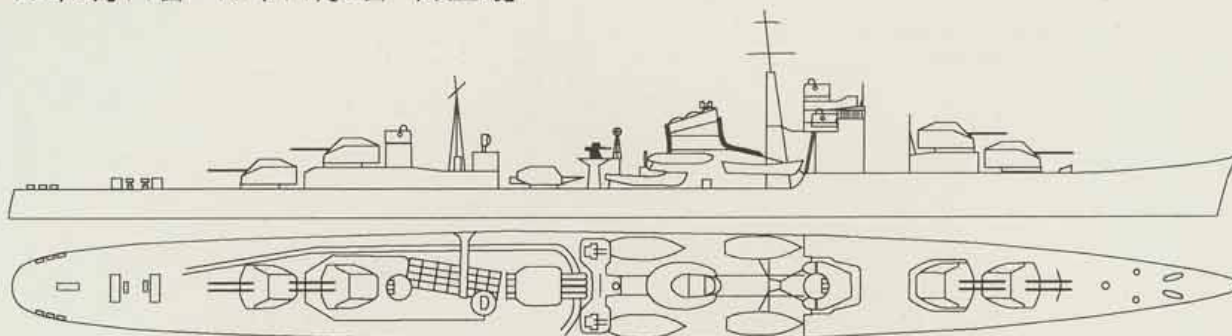
工程の全般に責任があることになっている造船部の関係者には、後日装備は工程を左右する重大原因の一つとしてある程度論議すべき対象であった。

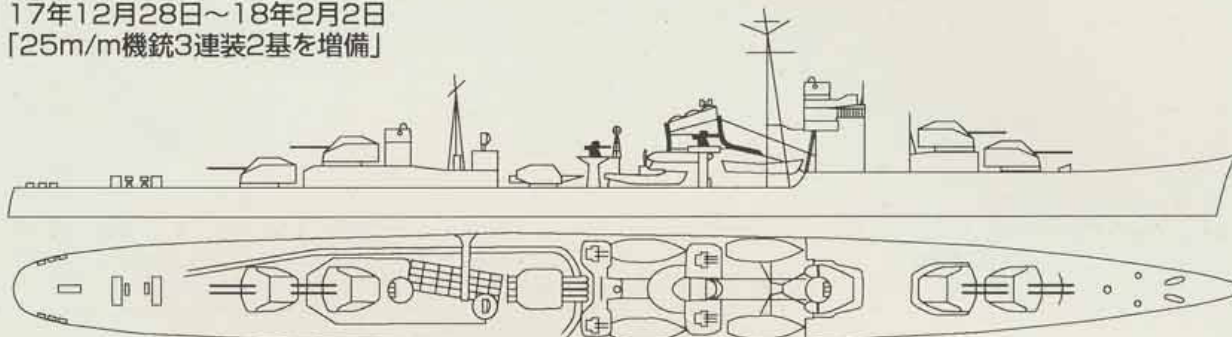
次に後日装備になったとしても、要目簿に後日装備が必ず明記されていたとは考えられない。要目簿は本来のあるべき姿が書かれるべきものだから、本来装備されるべき物であれば、引渡し時には未装備でも要目簿に記載すべきものとされても不思議ではないよう

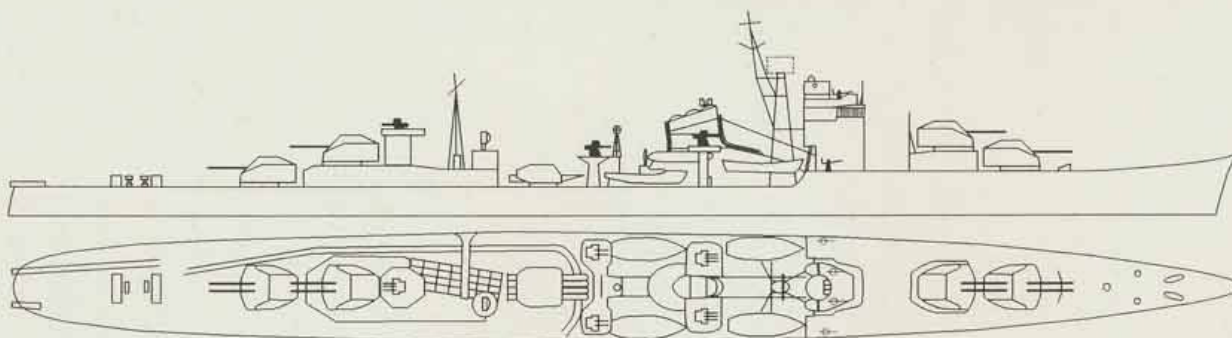
「ディープビーム」及「ウエブフレーム」
普通「フレーム」及「ビーム」
重油タンク
缶室
重油タンク
船体中心
1600
2600
3750
4750
2500
1450
1500
3750
2900
4150
1WL
11,600

秋月型中央部構造切断

米潜「ノーチラス」からの魚雷の影響でキールが切断し、サイパン港で応急修理途中の「秋月」。この後、艦首を切断し本土へ回航された。

「秋月」艦首部復旧工事（霜月の艦首部結合）
「戦時に於ける大型駆逐艦の損傷について」掲載の第２図を基に一部修正して作成した。
「霜月」艦首部切断略図
フレーム 73
結合部
側面図
「秋月」中央部
「霜月」艦首部
87
85
83
81
79
77
75
73
平面図
「秋月」中央部
「霜月」艦首部
艦首
通風筒 通風筒
煙路
煙路
煙路
同上 同上
97
95
93
91
89
87
85
83
81
79
77
75

CONFIDENTIAL

A destroyer of the new 2,300-ton, 34-knot TERUTSUKI class. The four turtle-back turrets each house two dual-purpose 4-inch guns. The guns have been described as 80-caliber, with an effective range of 16,000 yards. A quadruple torpedo mount, probably carrying 24-inch torpedoes, is located forward of the #3 turret. There appears to be a radar array on the foremast slightly above the top of the forward director and just aft of it. It is about as large as our SC type (roughly 8'x 8'). It seems to have a large pedestal structure which might be a housing for the transmitter, thus eliminating long transmission lines. The array itself has an odd contour. The lower part is vertical, while the upper part has a backsweep. This may represent an attempt to provide simultaneous air and surface coverage. The foremast sweeps back radically from the radar platform. Two objects separated by an undetermined distance appear almost at the top. They may be UHF or VHF antennae or radio or radar detection and direction-finding antennae. No equipment appears in the mainmast, so presumably it serves only as a communication antenna support. No fire control radar antenna is visible.

米海軍の極秘文書に掲載の復旧後の「秋月」(上)。下はその拡大写真。米側は秋月クラスを終始(戦後に至るまで)照月クラスと認識していた。

17年6月11日～17年11月6日　「竣工時」

65口径10cm高角砲連装4基、25mm機銃連装2基、61cm魚雷発射管4連装1基、九三式魚雷8本、九四式爆雷投射機2基、爆雷投下台6基(水圧式2、手動式4)、爆雷54個、九三式水中探信儀1基、舷外電路

17年12月28日～18年2月2日
「25m/m機銃3連装2基を増備」

17.11.6～17.12.28 (11.8～12.26入渠)	横須賀工廠にて修理。煙突横両舷に機銃台を設け、25mm機銃3連装を左右舷に各1基増備。
18.1.19	米潜ノーチラスの雷撃2発(1発は不発)を受け損傷。
18.2.2～18.3.11	トラック島にて修理(1、2番砲塔撤去)

18年11月4日～19年6月28日
「25mm機銃3連装1基を増備、25mm機銃連装2基を3連装に換装、13mm機銃単装4基を増備、二一号電探、逆探装備、九三式水中聴音機装備、爆雷投下軌条2基装備(爆雷投下台6基を撤去)」

18.7.5～18.10.31	三菱造船長崎造船所にて修理。
(7.8～7.18 7.23～8.12 8.13～9.1 9.16～9.22 10.16～10.23 入渠)	艦首部、1、2番砲塔、艦橋取付け。後部高射機の位置に25mm機銃3連装1基を装備、25mm機銃連装2基を3連装に換装。二一号電探、逆探、九三式水中聴音機を装備。爆雷投下台6基を撤去し爆雷投下軌条2基を装備。
18.10.31～18.11.4	佐世保工廠にて残工事実施。13mm単装機銃4基を艦橋横両舷と指揮所に装備。
19.3.30～19.4.4	シンガポールにて整備。

は、機動部隊を護衛し夕刻には豊後水道を通過し、再び帰ることのない日本を後にしたのである。

秋月の死闘と沈没の原因

一九年一〇月二五日朝、小澤中将の率いる機動部隊に対し米軍機の攻撃が始まった。

八時二五分、「秋月」は砲撃を開始したが、約二〇分後の八時四五分頃、艦の中央部で大爆発が起こり八時五五分に沈没した。

沈没の直接の原因は、米軍機の投下した爆弾が魚雷発射管あるいは発射管の近くに命中し、魚雷の誘爆により艦の中央部に大損害を受けたためと考えられる。

これにより主機械、主缶、補機類の機関部機器は全損し、機関長を含む八七名の機関科員は、数名を除き一瞬のうちに全滅した。また艦内の電気はすべて停電となり、この時から機器はすべて機能を停止した。

「秋月」の沈没は、今日まで米潜「ハリバット」の雷撃によるものという説が根強くあり、緒方艦長の語った魚雷の誘爆が味方の対空砲火の破片によるものという話などもある。

また、『戦史叢書』の『海軍捷号作戦〈2〉』四〇八ページには、次のように書かれている。

「……秋月が突然『もうもうたる黒煙ならびに火焔を認めた瞬間、真二つに折れて沈没』したのが目撃された。それはあたかも魚雷の誘爆によるもののように見えた。しかし、実際には魚雷の誘爆は起きていなかった」

これは、魚雷の誘爆を否定している不思議な説である。

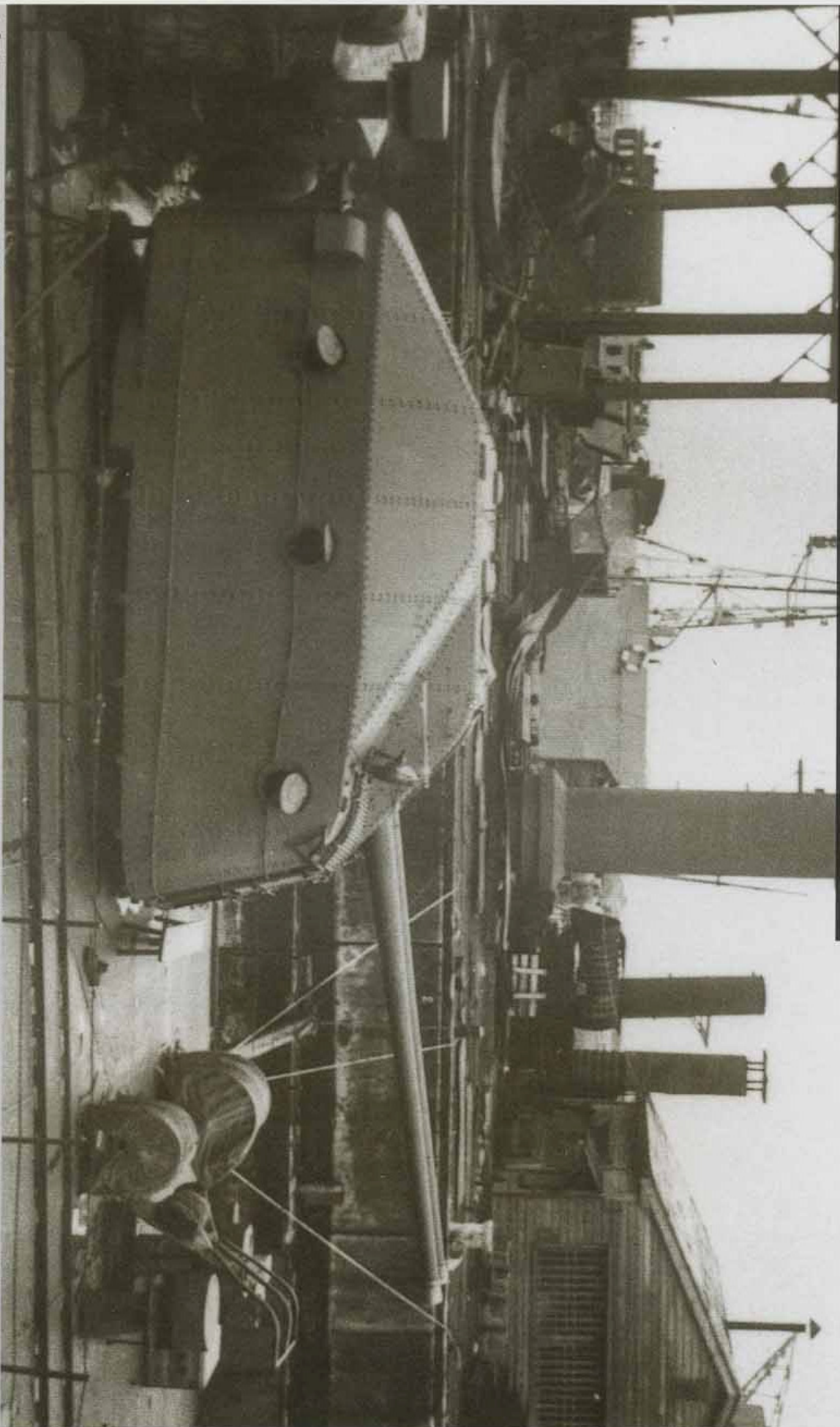
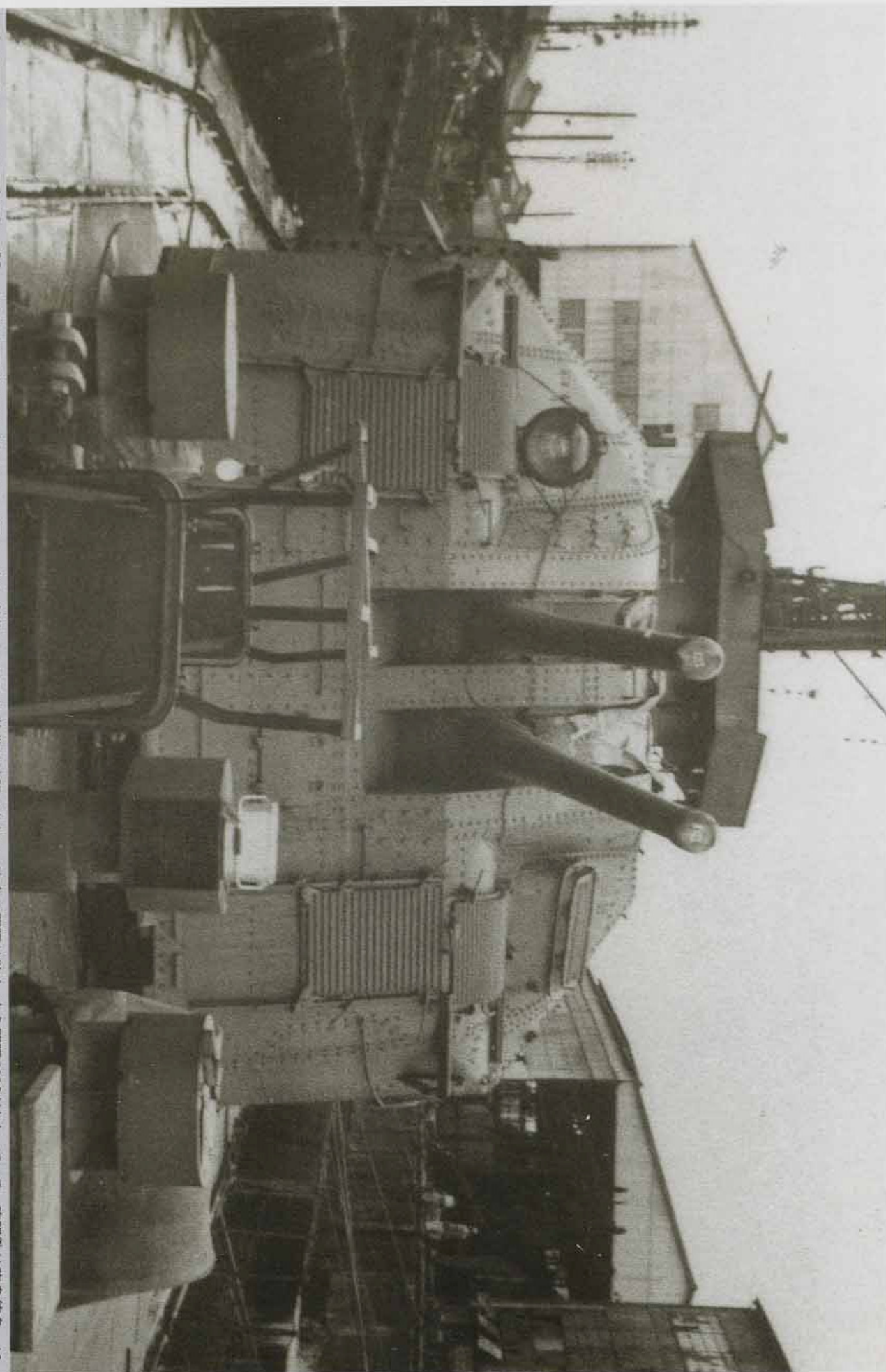
しかし、前部機械室の真上の発射管のあった所に楕円形の大穴が開き、九三式酸素魚雷四本を装塡した発射管が全く見当たらないことから、魚雷の誘爆以外には考えられない。

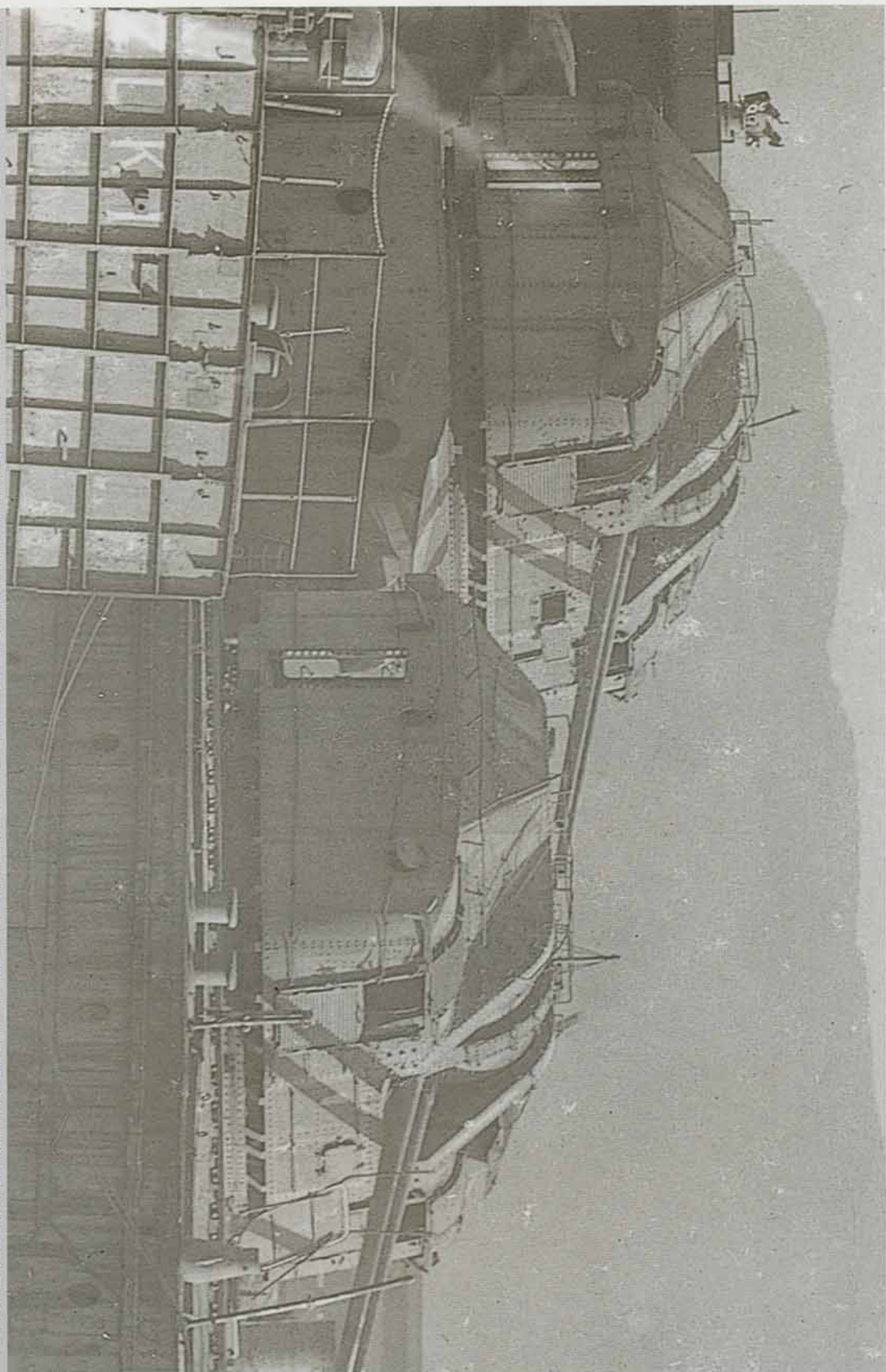
ここでの記述は、米軍機の爆撃を目撃した複数の乗員の話と、「秋月」の『行動調書』に書かれている交戦記録に「中部聯管に被爆」とあることから、発射管付近に命中した爆弾により魚雷が誘爆したものと考えた。

誘爆したと思われる九三式酸素魚雷四本の炸薬量は、合計三・六トンに達し、この爆発で「秋月」が轟沈しなかったのが不思議なほどである。

この時の被爆状況を山本民法氏（主計科。一七、五、二〇～一九、一〇、二五。戦後死亡）は次のように述べている。

65口径九八式10センチ高角砲

写真・資料提供＝遠藤昭・原勝洋・H.P.S・
海上自衛隊第一術科学校・
U.S. NATIONAL ARCHIVES

春月の4番砲塔 秋月型用の砲塔式九八式10センチ連装砲A型のシールド（楯）は独特の形状をしており、簡単な組立図面だけでは立体的に把握することが難しい。この写真は、側面のナックル・ラインの微妙な傾斜、鋲配置、ジャッキ・ステー、丸窓、砲身のテーパーの付き方等に関して具体的な情報を与えてくれる。

春月の4番砲塔

右砲側(画面向かって左)のライトが目につくが、他艦でこのライト装備は確認できない。砲身の間隔は狭く、中心間隔660ミリとなっている。砲眼孔は砲身俯角−10度から仰角(高角)+90度まで対応するよう長い開口部となっており、砲身の上下の隙間は円弧状の弾片よけ砲眼孔覆鈑によって塞がれている。

涼月の3番・4番砲塔

砲身両側の砲側照準窓の構造は百葉箱に似た鎧戸式になっている。写真を見ると3番砲塔は前面窓と上部窓が、4番砲塔では前面窓がそれぞれ開いているが、開閉は前面窓が上下スライド式、上部窓は左右スライド式であることが判る。119ページの写真で上部窓とレールの関係がある程度わかる。

涼月の3番・4番砲塔

シールド天蓋に上るモンキー・ラッタルや手すり等の付着物に関して、この「涼月」と先の「春月」とでは違いがあることが判る。後部マストの一三号電探アンテナ取付け支基が3個の肉抜き孔の開いた長三角形の板材2枚で構成されているのが識別できるが、「宵月」も同じ形状であることが確認されている。